帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

得宗・大仏・都市

―鎌倉大仏造立と都市経営―

馬淵和雄

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．鎌倉大仏と得宗
(1)大仏造立の経緯と不明点
(2)鎌倉大仏と河内鋳物師たち
(3)忍性と鎌倉大仏・河内における叡尊
(4)左方燈炉作手惣官中原光氏
(5)叡尊下向と鎌倉
(6)行基と叡尊・聖武と時頼
(7)金銅大仏の完成
(8)「かまくらニひそめく事」
Ⅲ．得宗と都市経営
(1)都市と寺社
(2)竪穴建物の意味
Ⅳ．むすび

Ⅰ．はじめに

鎌倉時代後期は産業・流通が飛躍的に進歩した時代である。現象面でみれば、たとえば産業においては、窯業の拡大・鋳物師組織の全国展開・漆器の大発展・石製品の大量流通などに現れる。窯業では狭域に流通する陶器窯が各地に生まれ、瀬戸をはじめとする既成の窯にも技術革新が起きた[1]。河内鋳物師は全国に拡散して在地の職人となる一方で、職人が船で各地を訪れる方式も確立した[2]。漆器生産では、精緻な文様と優れたロクロ技法による椀・皿が、遺存条件さえ許せばたいてい大量に出土し、技術的にも量的にもおそらく史上例をみないほどの発展をとげた[3]。石製品では天草や山城産などの砥石、周防産の硯、北西部九州を中心に産出される滑石鍋が各地の遺跡で出土するようになる。流通において考古資料を挙げるとすれば、竪穴建物の出現が好個の例であろう。物資の集積施設であると推測される半地下式のこの遺構は、鎌倉の港湾部や東国の街道沿いに特徴的に出現する。ほかにも、産業・現業の分野において、この時代急激に発達した例は多い。

そしてそれに呼応するかのように、この時代には宿・市場といった交通・交易の結節点

が次々に「都市的な」場に成育していく。鎌倉時代後期はまた、各地に続々と都市や町場が生まれる時代でもあったのだ。

この現象に通底するものはあるのだろうか。私はあると考える。この時代は「得宗専制」と呼ばれる時代だが、政治体制がそうであったとすれば、産業や流通機構にその影響が及んでいなかったとは考えにくい。あったとすればどの程度だったのか、どういう方法によったのか。私の脳裏に浮かぶのは、得宗政治と不可分の関係にある宗教勢力のことである。彼らのうちのあるものは、ときに支配者の意思の完全な体現者となった。

たとえば、よく知られているところで、西大寺流律宗を例に挙げよう。彼らは幕府の意を受けて、各地の港湾を修築し、交通の要衝を掌握した。諸国国分寺の再興を試み、国衙工人と結んで地方中核都市に勢力を伸ばした。街なかに井戸を掘り、橋を架け、道をつくった。彼らは、実生活に不可欠の現業部分を負担し、幕府行政をいわば下から支えた。もし「得宗専制」が、政治分野だけでなく、人々の生活にまで影を落としていたとすれば、西大寺律はその先兵だったに違いない。

また一方で、後述するように、この時代特に東国においては、天台宗など旧仏教勢力に替わり、建長寺派に代表される臨済禅の著しい勢力伸長がみられる[4]。臨済禅は西大寺律と協力して、幕府の地域経営における宗教的支柱の役割を果たしたのではないか。彼らもまた得宗政治の浸透におおいに与かったと推測される。これをひとまず、権力側からの動き、といっておこう。

以上の粗雑な推測が正しいとすれば、鎌倉時代後期、宗教勢力は民衆の側においても、権力の側においても、核心にいる存在ということになる。産業・流通にも彼らの深い関与があったはずだ。すなわち、この時代を語るに宗教勢力を抜きにはできない。それが私の作業仮説である。

では、どのようにして得宗と宗教勢力は協力関係を結んだのだろうか。何を契機にそれは達成されたのだろうか。唐突ながら私は、実は鎌倉大仏の造立こそその中心にあった事件だったのではないかと考える。それは、鎮護国家をめざす鎌倉幕府にとって、容易に想像できるように、宗教勢力との一体化を示す巨大な記念碑であった。その結果、幕府の地域経営は大きく進展した。大仏造立は得宗専制成立過程における最大の画期であった、と想像する。

とすればなにより、あまりに不明な点の多い鎌倉大仏そのものが、まず解明されなければなるまい。いつ完成したのか。なぜそのときでなければならないか。当初木像で造られていたものが、何のために数年のうちに金銅仏に変えられたのか。鎌倉大仏とは何か。本稿の課題の第一はそこにある。

しかしそれだけではない。課題の第二は、大仏完成を契機として達成された宗教勢力と

の協力関係は何をもたらしたのか、という点にある。各地の都市や町場を鎌倉幕府が管理するとき、それはどういうありかたをとったのか、これをいくつかの都市遺跡の例で検討してみたい。先に挙げた宗教者の活動はきわめて多面的であり、痕跡はいたるところに残るが、なかんずく都市において顕著である。なぜならば、彼らがもっぱら教化の対象とした手工業者・芸能者・肉体労働者たちは、都市という場においてこそ最も求められた存在であったからだ。そして、考古学はそれらの痕跡の検出に最もふさわしい手法である。ここでは、いくつかの要素を抽出することにより、都市経営における宗教勢力の関わり方をみてみたい。

宗教者と職能民の関係について、考古学では今のところ瓦の系譜に律宗系工人の関与を想定する以外、あまり研究されていない。遺構における宗教者の関与についても、ほとんど論じられたことがない。本稿ではできればこの方面からの接近も試みたい。

念のためつけ加えておくが、私はすべてを宗教者の事蹟として説明するつもりでは、もちろんない。ただ、彼らの活動が得宗専制といわれる体制のなかで果たした役割があまりに大きく、まずその端緒から議論を始めるべきだと考えたのである。

II．鎌倉大仏と得宗

(1)大仏造立の経緯と不明点

『吾妻鏡』暦仁元年（1238）三月廿三日条は、念仏僧浄光の勧進により大仏堂事始があったことを伝える。同年5月18日、「周八丈」（『吾妻鏡』同日条[5]、以下同じ）の頭を挙げた。仁治二年（1241）3月27日、大倉北斗堂立柱上棟と同じ日、大仏殿上棟。寛元元年（1243）6月16日、八丈余の大仏および大仏殿供養。しかしこのときの大仏は、完成前年の仁治三年（1242）秋の見聞である『東関紀行[6]』によれば、今と違い木像であった。

建長四年（1252）8月17日、彼岸第七日、金銅大仏の鋳造がはじまる。これが現存の像である。『吾妻鏡』のこの日の記事には釈迦如来像とあるが、実際は阿弥陀仏である。木造大仏完成後わずか9年にして、金銅製大仏を造りはじめた理由は明らかでない。寛元元年完成の木造仏が宝治元年（1247）9月1日の大風で壊れたからとする説[7]、木造仏は金銅仏の原型だったという説[8]に大きく分かれるが、いずれも説得的とはいいがたい。おそらくそこにこそ、鎌倉大仏造立にまつわる重要ななにものかが隠れていると推測する。

ところで、鎌倉大仏造立の趣意などを記した『大仏旨趣』と題された文書が金沢文庫保管史料のなかに発見され、高橋秀栄によって先に紹介されている[9]。そこには、東大寺大仏を鎌倉大仏に対置するかのような表現がある（「アノ東大寺ノ大仏ハ聖武天皇ノ御願……」）。上横手雅敬はここから、「関東大仏は東大寺大仏に対立して造られた」とし、そうである

以上「それは木像ではあり得ず、東大寺同様に金銅像でなければならない。木像は暫時の仮設であり、当初から究極的には金銅像の制作が企図されていた」という[10]。上横手のこの推論の前半は正しい。しかし「暫時の仮設であり」以下については、清水真澄の「堂の事始めがあり、上棟の儀式が行われ、仏殿に安置された大仏は、あくまで完成された像であり、最初から鋳造するためにつくられた原像ではないはず」という指摘[11]が、反論として成立しうるだろう。

これについては後に触れるが、ひとつだけ蛇足を加えておこう。

寛元元年（1243）は、東大寺大仏造顕の「詔勅」が鎮護国家建設を推し進める天皇聖武により発せられた天平十五年（743）からちょうど500年後、建長四年（1252）は同じく大仏開眼供養の年天平勝宝四年（752）から500年後に当たる。天平十五年正月13日、聖武は大和国金光明寺の最勝会において「像法中興」を誓った[12]。仏像を造り、仏法を興隆させるの意である。その500年後中世東国に造立された大仏は、おそらく『日本霊異記』にいう「正法五百年[13]」を意識していた。そしてその節目の時期に、聖武の標榜した「像法中興」の故事に倣ったものと推測する。上横手の推論の前半は正しい、といったのはその意味である。この点は後述する律僧叡尊の活動ともよく呼応するので、注意したい。

なお、大仏は念仏僧浄光の勧進によって造られたとはいうが、実態は幕府主導の国家的事業であったことに疑いの余地はない。この点については上横手「鎌倉大仏の造立[14]」を参照されたい。

現存の金銅大仏の完成がいつなのか、それもよくわかっていない。これほどの大事業でありながら、不思議なことに、鎌倉大仏造立については不明の点が多いのである。清水真澄は、大仏鋳造に携わった河内鋳物師丹治久友の肩書に注目して、次のように完成時期を推定している。

丹治久友は鎌倉大仏鋳造前後の時期、関東や畿内でいくつかの梵鐘を鋳造した。文応元年（1260）庚申十一月廿二日銘の武蔵国川越養寿院の鐘には、彼は「鋳師丹治久友」とある。しかし、文永元年（1264）甲子卯月五日銘の東大寺真言院の鐘には「新大仏寺大工丹治久友」として現れる。また、同年甲子八月銘の大和国金峰山蔵王堂の鐘にも「新大仏鋳物師」とある。つまり、文応元年にはなかった「新大仏」の文字が文永元年になると加えられており、この間に完成したのではないか、と清水はみる[15]。

上横手雅敬はこの意見に一応の賛意を表した上で、『吾妻鏡』に金銅仏完成の記事がないのは欠巻によるためだとし、弘長二年（1262）か文永元年（4月5日以前）の可能性を指摘する[16]。

両者の意見、それぞれに聞くべきものがあるが、いまひとつ決め手を欠くように思う。この問題については、以前私も考えを述べたことがある。しかし、それはいかにも簡単に

過ぎたので、以下であらためて論じてみたい。その作業は、造立意図をもいく分かは浮き彫りにするはずである。

(2)鎌倉大仏と河内鋳物師たち

周知のとおり、金銅鎌倉大仏造立には多くの河内国丹南の鋳物師が参集した。前出の丹治氏、建長寺鐘や円覚寺鐘を鋳た物部氏、房総の鐘に名を残す広階氏・大中臣氏らはその代表である。彼らはその後も東国で活動し、多くは定着した[17]。丹南鋳物師たちは何に導かれて、遠国での大仏鋳造に加わったのだろうか。

丹治氏

丹治久友は大仏鋳造ののち、常陸筑波山麓宍塚にある般若寺の建治元年（1275）銘梵鐘を造った。般若寺は忍性が筑波一帯で最初に結界して以来、西大寺流律院となった寺である。このことはとりもなおさず、久友と西大寺律とのつながりを示していよう。先に触れたように、彼は「新大仏寺大工」の肩書で東大寺真言院再興（建長五年～文永十一年）の際梵鐘を鋳た。この再興にあたったのは律僧の聖守で、唐招提寺の覚盛の弟子である[18]。覚盛は暦仁元年（1238）10月28日西大寺で結界、寛元三年（1245）9月和泉家原寺で叡尊とともに別受を行っているので（『律苑僧宝伝[19]』）、弟子の聖守も叡尊とつながりがあったのは間違いない。なお、忍性が東大寺大勧進職に襲くのは永仁元年（1293）のこと[20]。

丹治久友は文永元年銘の吉野金峰山蔵王堂鐘にも、「新大仏鋳物師」として後述の広階友国・藤原行恒とともに記名があるが、修験の霊場である金峰山寺と叡尊・忍性とは因縁浅からぬものがあったことはよく知られている。丹治久友と叡尊・忍性教団との関係は明白だろう。

物部氏

物部一族も関東でたくさんの鐘を鋳造した。坪井良平『日本の梵鐘』・赤星直忠「鎌倉の古鐘」・鎌倉国宝館『鎌倉の古鐘』ほかに拠って、主なものを拾い出してみよう。数が多いので箇条書きにする。梵鐘個々の詳細については、これらの書を参照されたい。

物部重光――武蔵都幾川慈光寺鐘（寛元三年＝1245）・相模鎌倉建長寺鐘（建長七年＝1255）

物部季重――武蔵高麗勝楽寺鐘（文応二年＝1261）・相模鎌倉長谷寺鐘（文永元年＝1264）

物部国光――安房館山大荘厳寺（小網寺）鐘（弘安九年＝1286）・相模海老名国分尼寺鐘（正応五年＝1292）・武蔵杉田東漸寺鐘（永仁六年＝1298）・武蔵金沢称名寺鐘（正安三年＝1301）・相模鎌倉円覚寺鐘（同前）

物部守光――相模瀬谷妙光寺鐘（旧武蔵恩田万年寺鐘，正中二年＝1325）

以上のほかにも、道光・光連など物部一族の鋳た梵鐘はいくつかあるが、南北朝期にかかることもあり、当面の主題から離れるので省略する。これを一見して明らかなことは、関東祈禱寺の多さであろう。例えば、慈光寺・建長寺・円覚寺がそうであるし、称名寺もまず確実である。東漸寺についても、開山の宏覚が建長寺開山蘭渓道隆の高弟であるところから[21]、可能性は高い。物部氏は幕府とのつながりが大変深いとみてよい。大胆にいうなら、彼らの造った梵鐘は、関東祈禱寺の所在を示しているのかも知れない。

宗派別でいえば、禅宗および禅宗色の強い寺が最も多く（慈光寺・建長寺・円覚寺・東漸寺・万年寺）、真言宗・真言律宗およびその系統（勝楽寺・大荘厳寺・相模国分尼寺・称名寺）が続く。後者のうち、称名寺は西大寺末であるが、相模国分尼寺についても西大寺流が諸国国分寺を再興、末寺化したことからみて、そうであった可能性が高い。大荘厳寺には、鎌倉一帯に集中的に分布する石窟墓である「やぐら」があり、行基開創伝説がある[22]。前者の禅宗寺院についても、禅律と併称されるほど律宗とは近い存在である上、鎌倉時代後期に関東祈禱寺と西大寺末寺とがよく重なることは、湯之上隆などにより確認されている[23]。長谷寺は浄土宗だが、正保二年（1645）以前は真言宗であったともいわれ、忍性の伝承を持つ[24]。物部氏においても、叡尊・忍性教団との関係が濃厚に認められるのである。

広階氏

広階氏においては、広階重守が建長八年（1256）下総国分山金光明寺鐘を、重永が弘長四年（1264）上総長柄胎蔵寺鐘を鋳ている。そして先にみたとおり、友国が「鎌倉新大仏鋳物師」を名乗って、丹治久友らとともに吉野金峰山蔵王堂鐘を造った。金光明寺は下総国分寺であり、鎌倉時代後期に西大寺流に再興された可能性が高い。あるいは、この鐘がそのことを物語っているのだろうか。また、繰り返すが、金峰山寺と叡尊・忍性とは関係が深い。広階氏と叡尊らのつながりも確実にあるといえる。彼らの梵鐘も、あるいは関東祈禱寺に寄進されることが多かったのだろうか。

以上、鎌倉大仏鋳造を契機に関東で活動するようになった河内鋳物師の動向を、簡略にみてきた。いくらか推測を交えはしたが、梵鐘寄進先の寺院に、ほとんど必ずといってよいほど叡尊・忍性教団の影が見え隠れしているのは、否定できないところである。河内鋳物師たちが彼らに教化されていた可能性は、きわめて高いと言わねばならない。

そして、この時期のふたりの高名な律僧の活動にも、注目すべきものがある。

(3) 忍性と鎌倉大仏・河内における叡尊

大仏造立の沿革は先に示したとおりだが、このころ大和西大寺にあった忍性が興味深い動きをしている。

忍　性

寛元元年、27歳の忍性は関東に来て7月に帰った(『性公大徳譜』[25])。9年後の建長四年8月14日、36歳の彼は常陸国に入る途上再び鎌倉を訪れる。そして、以後終生を東国に暮らすことになる(『性公大徳譜』『律苑僧宝伝』ほか)。彼の下向時期に注目しよう。建長四年8月14日は金銅大仏鋳造開始三日前にあたる。この符合は偶然ではあり得まい。おそらく彼は、何らかのかたちでこの行事に加わっていたのではないか。寛元元年の東下でも、帰着時期から判断すると、6月16日の大仏供養のころ鎌倉にいたことは十分にありうる。伝記のなかでは触れられていないが、彼は大仏造立の節目節目にあわせ、鎌倉に姿を現している[26]のである。のち大仏別当となる忍性の大仏との関わりは、はやくも寛元元年にはじまるとみてよい。西大寺流が関東大仏に、その造立当初からなみなみならぬ関心を寄せていることは明らかであろう。忍性の下向は関東に律儀を弘めるためだ、としきりに書かれているが(『性公大徳譜』『律苑僧宝伝』『元亨釈書』ほか)、そのひとつとして、大仏鋳造に主導的立場を確立するための工作があったと推測できる。

叡　尊

一方、叡尊の畿内での動きもまた興味深いものがある。『金剛仏子叡尊感身学正記』[27]によれば、それまで大和国での教化活動を専らとしていた叡尊は、寛元三年（1245）9月中旬、唐招提寺の覚盛とともに和泉国家原寺に出て別受を行って以来、にわかに南河内を中心にめざましい布教活動を開始する。

寛元四年（1246）2月26日、南河内磯長の叡福寺聖徳太子廟において502人に菩薩戒を授けた。同年10月25日、同じく南河内の土師寺（道明寺）でも236人に菩薩戒を授けた。建長三年（1251）3月上旬、河内安楽寺に釈迦像を安置する。そして52歳の翌建長四年（1252）夏、河内泉福寺に入り、十重戒を説く。7月25日には55人に菩薩戒を授けた。『感身学正記』同日条には、この時期忍性が関東教化に赴いた、と書き添えてある。建長六年（1254)、河内西琳寺での三日間の布教を経て3月13日真福寺に入り、結界の行を始めた。このときは西琳寺で232人に、真福寺で165人に菩薩戒を授けている。これ以後、叡尊の活動は和泉・摂津に移っているようなので、真福寺の結界をもって河内教化はいちおう達成されたとみてよかろう。

以上に見える諸寺のうち、泉福寺・西琳寺・真福寺の三カ寺は明徳二年（1391）の『西大寺諸国末寺帳』[28]に載っているが、末寺化はこのときの布教を契機とした、と考えるのが自然であろう。また、この三カ寺と土師寺（道明寺）が関東祈禱寺であること[29]は、注意を要する。鎌倉時代後期における西大寺流と関東祈禱寺との関係は、先の湯之上論文により明らかにされている。もしこれら四カ寺の関東祈禱寺化がこのときの布教をきっかけとしていたとすれば、鎌倉幕府と叡尊教団とははやくも寛元年間につながりをもっていたこと

になる。さらに、家原寺・土師寺（道明寺）・西琳寺など行基ゆかりの寺が多いことも見逃せない。彼の行基信仰は、このころ顕在化してくるようだ。

さて、真福寺に注目したい。この寺は丹南集落の中心部にあり、比定地周辺は、鍋鋳型の出土した真福寺遺跡[30]をはじめ、日置荘遺跡・観音寺遺跡・大井遺跡などの鋳造遺跡、丹治氏の氏神である丹治比神社などに囲まれている[31]。まさしく丹南鋳物師拠点集落の中核に位置している。その寺が西大寺末寺となった。それは一帯に西大寺流が弘通したことを意味しよう。このとき、丹南鋳物師たちも同流に教化されたとみて間違いない。

以上にみたとおり、金銅大仏鋳造に時を同じくして叡尊が河内での布教に努め、その一方で、忍性が造立の節目節目に関東に下向していることがわかる。両者は呼応するかのような動きを示しているのである。そして、河内鋳物師たちの関東での動きは、彼らの西大寺流への帰依を物語っている。事情はこれで無理なく整合する。すなわち、河内鋳物師たちを関東に誘ったのは、叡尊・忍性たちにほかならないのである。

(4)左方燈炉作手惣官中原光氏

当初の課題に戻ろう。では、金銅大仏の完成はいつだったのか。それに関して、注目したい史料がある。名古屋大学によって紹介された鋳物師文書中の史料[32]で、かつて網野善彦も言及したことがある[33]ものだ。

弘長二年（1262）12月、蔵人所から河内鋳物師左方燈炉作手充てに一状の牒が発せられた。それは11月に右衛門少尉中原光氏から提出された解への応答として出されもので、光氏が左方作手惣官職にあることをあらためて確認した内容である。

光氏は不安だった。右方と左方ふたつの河内鋳物師集団のうち、左方燈炉供御人（作手）の惣官であった彼は、宝治二年（1248）のころにはすでに東大寺鋳物師をも管轄下に収めていた[34]。けれども、近ごろ配下の鋳物師たちは、惣官である自分の言うことをきかなくなってきていた。守護・地頭や権門勢家にことよせてその威を借り、催促に従わない鋳物師の出現、西国諸関の新たな狼藉など、このところ頭を悩ませてきた問題に加え、近年関東や北陸に逃げ下る（「逃下」）者、惣官の下知に従わず、年貢を納めない者も現れてきた。光氏は自分が左方作手惣官であることの再確認と、それを周知させることを蔵人所に求めたらしい。12月の蔵人所牒はそれに応えたものである。

ここに窺えるのは、網野も指摘するように、鋳物師組織の動揺にほかならない。やがて彼らは各地に定着し、独自の組織を形成してゆく。それは光氏も追認するほかない抗しがたい流れではあったが、同時に、網野が正確に見抜いたとおり[35]、まぎれもなく組織崩壊の予兆でもあった。では一体、何者が動揺をもたらしたのか。

関東や北陸に逃げ下った河内鋳物師のうち、少なくとも前者については、年代からみて

鎌倉大仏鋳造に従事した者に違いない。そして、彼らが叡尊らによって教化されて関東に導かれたのは、先にみたとおりである。すなわち、組織に動揺をもたらした勢力とは、西大寺流律宗ということになる。

これらの点を念頭に置くと、中原光氏の解文の意味がおのずと浮かび上がってくる。おそらく光氏は、関東に行った鋳物師たちも、大仏鋳造が終われば河内に帰ってくると考えていた。しかし意に反し、鋳造後も彼らはそのまま彼地にとどまり、そこで独自に活動し続けかねないようにみえた。焦った光氏は蔵人所へ助けを乞うた。そして、自分こそが惣官であるということを強く主張し、離反しそうな部下への周知徹底を求めた。それが彼の行動の真相だったのではなかろうか。

以上の推測が正しければ、金銅大仏の完成時期について、大きな示唆が得られたことになる。すなわち、光氏の解の出された弘長二年11月ごろ、またはその少し前、という答えがひとまず導かれよう。上横手雅敬のいう弘長二年か文永元年のうち、前者の可能性が高くなったといえる。しかしもちろん、これだけの材料では決定的とするにいたらない。当地の鎌倉で弘長二年に起きた出来事をもみる必要があろう。この年は鎌倉にとって意義深い年であった。叡尊本人が大和から下向し、熱狂的に迎えられたのである。金銅大仏が完成したかもしれない年に、その鋳物師たちを誘った人物みずからが鎌倉を来訪――二つの事件の深い関連を想像しないではいられない。

(5)叡尊下向と鎌倉

弘長二年（1262）２月４日、西大寺流真言律宗流祖叡尊はかねて前執権北条時頼らから懇望されていた関東教化のため、大和を進発した。叡尊62歳、総勢15人ほどで東海道を進み、２月27日鎌倉に到着。７月いっぱいか８月初めごろまで滞在し、８月15日に西大寺に帰った。『関東往還記』は、この旅の消息を伝える（８月１日以降を欠く[36]）。

叡尊は鎌倉で精力的に活動した。彼は幕府にとって、ひとり正法を行い化導に努め（『関東往還記前記』弘長元年十二月廿八日条）、徳行常篇を超える高僧であった（『往還記』弘長二年五月十七日条）。『往還記』によれば、連日のように時頼ら有力者と会見し、帰依され、戒を授ける。常陸三村寺に人夫を遣り、聖教や法具類を取り寄せる（三月五・十二日条）。忍性・頼玄ら高弟たちは三村寺から同法僧を連れてくる（三月十四・廿日条）。ほとんど連日連夜古迹を講じ、三日にあげず数十・数百人に授戒する。数百・数千、ときに数万もの「貴賤」がひっきりなしに結縁する。海岸部（前浜）や大仏周辺という鎌倉周縁部も教化した（五月一日条）。寿福寺の禅僧や、それまで鎌倉でさまざまな勧進をしてきた念仏者の主領も彼に帰伏し、建長寺の禅僧さえ菩薩戒を受けた（三月二日・七月十八日・同十九日条）。『往還記』が叡尊の弟子性海の筆になることを割り引いても、彼を迎え

た鎌倉の熱狂ぶりが想像できる。5ヵ月の滞在は大成功だった。鎌倉は叡尊一色に染まったかのようだ。

彼の関東下向がもたらしたものは何か。私は以前、およそ次のように書いた。

五月一日条によれば、前浜と大仏周辺に二人の高弟を遣り（「忍性向浜悲田。頼玄向大仏悲田」）、人々に食をふるまい、十善戒を授けた。このとき叡尊教団の勢力は、幕府の意を受けて、鎌倉周縁部に浸透した。のち極楽寺長老が検断権を持つことになる前浜の殺生禁断は、おそらくこのとき始まった。それは前浜一帯における教団の支配権の確立であったと同時に、既成の宗教勢力と統治秩序に対する、いわば前線突破ともいうべき出来事であった。それは、ただ叡尊教団が前浜を支配したというだけではない。以来鎌倉には、中核部を幕府が、周縁部を忍性の極楽寺が管理するという二元的統治構造が生じるが、それだけでもない。真に重要なことは、これにより北条得宗が西大寺律との一体関係を成立させ、以後専制的支配を全国の端々におよぼす、その突破口となった点にある、[37]と。

いま、もうひとつ付け加えておこう。いったいに『往還記』には、五月一日条がそうであるように、しばしば重要な事実が素っ気なく書かれている。先に紹介した三月二日・七月十八日・同十九日条に注意したい。上横手雅敬もいったとおり、ここにみられるのは念仏と禅が西大寺律へ慴伏する姿にほかならない。のちに日蓮が激越な口調で攻撃する、念仏・禅・真言・律という四宗の一体化があったとすれば、これらの記事はおそらくそのことを示している。叡尊下向は、宗教勢力の糾合をも果たしたのである。幕府宗教政策における顕密寺院から禅律寺院への重心の移行は、時頼の寛元年間（1243～1247）ごろから顕著になるようだが、それもこのときほぼ完成したのではないか。叡尊の鎌倉訪問は、達成された内容とその後の彼らの事蹟をみるとき、得宗政治にとってきわめて大きな画期であったことがわかる。

ともかくも、こうして西大寺・極楽寺勢力は幕府と緊密な関係を結んだ。彼らがどのような活動を展開したか、詳細は中世考古学の厖大な課題だが、すでに知られている事実のみを簡単に挙げておこう。

石工や鋳物師など多様な職能民を組織して、その全国展開を促した。街に井戸を掘り、正地（整地）地業をし、架橋や作道をおこなった。各地の港湾を修築し、交通網の要衝を管理した。国府など地方中核都市に勢力を伸ばし、国分寺の再興に腐心した。それらはいわば、社会を基層で支える活動である。つまり、彼らは行政のうちでも実生活に不可欠の現業部分を負担する、幕府にとってなくてはならない存在であった。そうして深く権力に食い込み、鎌倉時代後期に「爆発的」といわれるほどの全国展開をみせた。[38]叡尊教団が全国910箇所で敷いたという「殺生禁断」[39]も、鎌倉でのそれと同様、幕府によるその地の権益の保証にほかなるまい。

結局、叡尊は幕府の意図を体現する存在だった。この時代の政治・社会体制を「得宗専制」と呼ぶとすれば、そのなかでの叡尊・忍性教団の役割は、いくら大きく評価してもし過ぎることはない。そうであれば弘長二年という、大仏が完成した可能性の高い年に教団の首魁である叡尊の来訪があったのは、とても偶然の一致ではありえまい。

先述の、叡尊に対する幕府の評価を思い出そう。彼は幕府にとってひとり正法を行い、化導に努め、徳行常ならざる高僧であった。この異例ともいうべき高い評価を擁して、時頼・実時は慇懃に、かつ執拗に関東下向を請うた。その結果は関東に西大寺流律宗が一気に弘通しただけではない。狙いどおり得宗政権はこの教団と一体化し、専制的支配を確立することに成功した。のちに触れるように、金銅大仏完成こそ覇権の象徴だった。それはかつて、天皇聖武があの行基らとともに推進した鎮護国家建設の方法そのものである。いかにも鎌倉大仏は、『大仏旨趣』にうかがえるとおり、東国政権における盧遮那大仏であった。とすればそこには、いにしえの高僧に見立てられるべき当代随一の僧がどうしても必要だった。この点は後論する。

叡尊らの行基信仰は有名で、鎮護国家的性格は指摘されるまでもない。鎌倉大仏が東大寺大仏に対比されるべき存在であることも、当たり前というべきだろう。この一見自明のような側面はもっと強調されてよいが、これまでそれほどでもなかったかにみえるのは、ひとえに叡尊教団と鎌倉大仏造立とのつながりが不明であったことに起因する。先にその点はいくらか明らかにしたつもりである。しかし、なぜ行基なのか。この点について、もう少し検討したい。

(6)行基と叡尊・聖武と時頼

先にみたとおり、関東に赴く直前の叡尊は、行基生誕の地と伝わる家原寺で別受をおこなって以来、土師寺・西琳寺など行基ゆかりの寺を次々に訪れている。太子廟では授戒をおこなった。彼の著名な行基信仰・太子信仰はこのころ顕在化してくるが、社会活動においてもそれを実践しようとした。先に挙げた西大寺流のさまざまな社会事業は、行基の活動[40]をそのままなぞろうとしたものである。行基は文殊の化身でもあるから、しきりに文殊像の奉納もおこなった。いま全国各地に残る行基伝承は、あるいは叡尊・忍性教団が熱心に行基を顕彰してまわった、その痕跡なのかも知れない。なお、行基が死んだのは天平二十一年（749）で、建長元年（1249）はその五百年忌にあたるが、この年4月には西大寺釈迦如来像内に仏舎利が納入されている。

ところで、忍性墓塔のある大和竹林寺は、鎌倉時代に復興、または創建された西大寺末の律寺である。ここはその東南の興山往生院とともに、行基の墓所ともいわれる。寂滅という僧が文暦二年（1235）9月に書いたとされる『生駒山竹林寺縁起』（『行基菩薩御遺

骨出現記[41]』）には、次のような話が伝わる。

天福二年（1234）6月24日酉の刻、行基廟のかたわらに庵を構えていた僧慶恩の前に行基が出現、自分の墳墓上の石塔に舎利二粒を納めたといい、26日に開いてみよと告げた。26日に開くと確かにそれがあったが、道俗は石塔の新しいことを知っており、勝事とは信じなかった。すると行基の母が現れ、舎利が出たのになぜ疑うのかと問い、遺骨を取りあげて疑心を除けと託宣を下した。そして、その年12月に慶恩の室内に白煙が満ち、行基廟を煙が覆った。翌文暦二年（1235）8月11日、再び行基が現れ、先の煙はみずからなしたものだといい、8月25日に墓所を開けよと託宣した。指示どおり開くと、今度は舎利瓶が出てきた。その瓶には銘文が刻まれ、行基の死の前後の様子、遺灰をそれに納めたこと、瓶を多宝塔として慕うこと、などが記されていた。

この『縁起』は舎利瓶の出現譚というかたちをとっているが、実はおのずからこの地が行基墓所であることを読者に印象づける内容になっている。だが、この話は少しくどい。できごとの連鎖と符合が、理に落ちた印象を与える。本当だろうか。

前園実知雄[42]や千田稔[43]らによる近年の行基と行基墓の研究は、この出現譚の真偽に肯定的な評価を下し、往生院よりも竹林寺のほうに墓所の可能性をみている。一方、長谷川嘉和・追塩千尋・細川涼一などは、寺勢を盛んにするための僧侶による演出との疑いを抱く。長谷川は、往生院が本来の行基墓地であり、そこから舎利容器が寂滅の草庵に移されたので、ここが行基信仰運動の中心となって竹林寺が成立し、行基廟の往生院は竹林寺奥の院とされた、という[44]。また細川は、『縁起』にみえるたびたびの託宣や奇瑞について、救済者（「メシア」）としての行基にまつわる奇跡を創出（「一種の宣伝」）することによって民衆感情を操作したものとした。そしてそこに、聖徳太子や行基・釈迦舎利の聖遺物崇拝を喧伝することによって信徒を獲得するという、律宗による民衆組織化方法の先駆を見出している[45]。

私の見解は後者に傾く。周知のように、忍性は生涯竹林寺と深い関係を持ち続け、遺骨もここに分納された。彼がはじめて竹林寺に参詣したのが、嘉禎元年（1235）であった（『性公大徳譜』『忍性菩薩遊行略記』ほか。ともに日付なし）。年紀に注意しよう。追塩も鋭く指摘するように[46]、嘉禎元年は舎利瓶の出現した文暦二年でもある。奇妙な符合だと言わねばならない。忍性は以後6年間毎月詣でたという。この出現譚は、自分たちこそが行基の正統を継承するものと位置づけたい叡尊教団が、世間に認知させる道具立てとして自作自演した可能性が高いと考える。そればかりではなく、私はこの話を演出した人物とは、あるいは忍性その人ではないか、との疑念を拭い切ることができない。

さて、いうまでもなく行基は東大寺大仏造営勧進である。彼は天皇聖武のもとで鎮護国家の建設に尽力した。そして、叡尊・忍性教団は職能民をよく組織し、行基の事蹟を踏襲

しようとした。強引な演出をしてまで、自分たちを行基の継承者に位置づけようとした疑いもある。とすれば、往古の東大寺大仏に対比されるべき新たな大仏が求められたのは、当然のなりゆきであろう。そしてそうであれば、上横手雅敬のいうように、それは金銅製でなければならない。

しかし、私は先に紹介した上横手の「木像は暫時の仮設であり、当初から究極的には金銅像の制作が企図されていた」という意見には同意せず、清水真澄のいう、木像は完成品として一度完結したとの立場に立つ。のち、金銅像製作があらたに決定されたと考える。その理由は、なお憶測の域を出ないのだが、北条政権による金銅像造立の動きと、叡尊・忍性らの活動が見事に呼応している点に、一端を窺うことができる。あらためておよその輪郭を整理してみたい。

叡尊・忍性教団にとっては、自分たち「新義律僧[47]」の勢力伸長には、社会活動をおこなうことにより世俗権力に認知させ、共生することが何としても必要だった。一方、東国武家政権にとって、支配強化のための国家祭祀の実現はきわめて重要な課題となっていた。そのためには、行基のように多くの技術者を組織することができる司祭が必要だった。ここにおいて、両者の理念、そして利害が強固に一致した。それが新たな金銅仏造立というかたちをとって現れたのではないか。行基に比すべきは、もちろん叡尊である。彼は鎌倉に来なければならなかった。そして、聖武は誰であったのか、と問われれば、誰しも躊躇なく時頼の名を挙げるだろう。

ところで、鎌倉とその周辺においては、大仏をはじめ様々な寺院や施設がまず浄土系念仏衆の勧進によって興され、それが漸次律に包摂されていく現象が、鎌倉時代中期から後期にかけてみられる[48]。これは上横手のいうとおり、専修念仏が排除され、諸行本願義が律に、そして幕府に従属していく過程でもある[49]。幕府による文暦二年（1235）と弘長元年（1261）の二度の念仏者取締令[50]が、破戒僧追放に名目を借りた、そのことの表出であるのは明らかだろう。その法令は、濫行の念仏者は「鎌倉中」を去れ、道心堅固の念仏者はこの限りでないという、無限定の解釈を許すものである。法令としてあまりに曖昧、かつ恣意的、というほかないそれは、持戒念仏を主張する諸行本願義優先の意思を幕府みずからが表明したものといえる。そして持戒念仏は、叡尊教団の戒律復興運動と容易に結びつくことが想像できる。

大仏造立において律が念仏を支配下に入れたときがあったとすれば、まさしく木像から金銅像への転換がそれであった。仏教説話集の『沙石集』で知られる無住は、弘長二年の叡尊下向を尾張山田郷の長母寺で迎えて以来この地で終生を過ごし、晩年近くの嘉元二・三年（1304・1305）に随筆『雑談集』を書いた。そこには、「律僧・禅僧ノ世間ニ多クナリ侍ル事、ワヅカニ五十余年也」とある[51]。とすれば、大体時頼の宝治年間（1247～1249）

か建長年間（1249～1256）が、転換の時期だったことになる。それは大仏の金銅像への転換ともまったくよく符合する。そして、このころ以後、鎌倉は急増した禅律僧の圧倒的な勢力下に入り、弘長二年に頂点を迎えるのである。

(7) 金銅大仏の完成

以上のことがらを念頭に置いて、再び金銅仏完成時期の問題に立ち戻りたい。先に述べたとおり、私はそれを弘長二年（1262）のことであったと考える。ここでもう一度これまでの成果を確認しておこう。

清水真澄は、鋳工丹治久友の肩書に、文応元年（1260）にはなかった「新大仏」の文字が文永元年（1264）4月5日になると加えられていることに注目し、この間に完成したのではないかと推定する。上横手雅敬はこの意見を一応の前提に、『吾妻鏡』に金銅仏完成の記事がないのは欠巻によるためだとし、弘長二年か文永元年（4月5日以前）の可能性を指摘する。疑うべくもない国家的事業でありながら、実に不思議なことに、正史ともいうべき『吾妻鏡』に金銅大仏完成の記事はない。したがって、『吾妻鏡』の欠巻年である弘長二年か文永元年に完成時期を求めるのは、ゆえなきことではない。清水・上横手両者に、私も基本的に同意する。その上でなお弘長二年とする理由を、次のようにまとめておく。

第一に、前提として、金銅大仏鋳造のために河内鋳物師を関東に呼び寄せたのが、叡尊・忍性教団であったということがある。それは大仏鋳造前後の叡尊・忍性の動きと、大仏鋳物師たちの梵鐘寄進先からみて明らかである。

第二に、河内鋳物師左方作手惣官中原光氏が、みずからの地位確認の解文を弘長二年11月に蔵人所に出していること。それは、大仏鋳造が終われば帰って来るはずの配下の鋳物師たちにその気配がなく、不安を覚えたからと想像できる。

第三に、東国武家政権にとって、大仏造立という国家祭祀を果たすことは、朝廷に拮抗しうる権威を獲得する上で喫緊の課題であり、それには何より、行基のような役割を持つ叡尊の東下を必要としていたこと。この点と前二点は、ここにおいて整合する。

以上が、金銅大仏の完成を弘長二年と考える理由である。けれども、私の目的はそれを明らかにすることだけにあるのではない。大仏完成は、鎌倉時代政治史のなかでどのような意義をもつのだろうか。次に、完成時期をより一層絞り込むことにより、その点に論及してみたい。

(8)「かまくらニひそめく事」

実は弘長二年には、全国各地で興味深い事件・事象が起きている。それらの多くは、こ

の年が得宗政権にとってきわめて重要な年であったことを示している。このことは以前にも書いたが[52]、大事な点なので再び記す。

まず、鎌倉においては叡尊の下向があり、これによって前浜など周縁部一帯に西大寺律が弘通した。先に書いたとおり、この事件は得宗政治にとってきわめて大きな画期となった。前浜の両端に位置する長谷寺（西端）・感応寺（東端）・光明寺（同）に、この年突然立てられる三枚の板碑は、おそらく前浜弘通に関わる。感応寺板碑（現在五所神社所蔵）には「弘長二年十一月廿日」の、長谷寺板碑には「□（弘）長二年七月十□」の銘がある（光明寺板碑は「弘長」とのみ読めた[53]）。

次に、全国に残る北条時頼廻国伝説に注目したい。豊田武の著名な指摘によれば、この伝説は得宗領、もしくは得宗とつながりのある場所に多く分布する[54]。豊田の収集した伝説をいくつかみてみよう。例えば、陸奥松島瑞巌寺はもと延福寺という名の天台寺院として開かれ、建長年間（1249～1256）に臨済宗建長寺派となり、円福禅寺と改められた。ここに僧形の時頼が訪れたのが宝治二年（1248）のことであった、と寺に残る『天台記』は伝える[55]。そして入間田宣夫によれば、この寺は弘長二年に建長寺開山蘭渓道隆が二世住持となり、関東祈禱寺となった[56]。津軽名久井法光寺に旅僧姿の時頼がやって来たのは、弘長二年11月だという。秋田県西明寺村には、弘長年中時頼の建立と伝える釈迦堂がある。「西明寺」とは「最明寺」であり、時頼その人を指す。

入間田は津軽藤崎護国寺の時頼廻国伝説にも注目する。この寺ももと天台系の旧仏教寺院として始まったが、時頼が訪れて禅宗に改められ、関東祈禱寺に列せられた。それはまさしく弘長二年のことで、伽藍の創建もその折りであった[57]。なお、このときの開山も蘭渓であるのは注意を要する。彼はほぼ同じころ、甲信地方においても二十数カ寺を開創している[58]。

私の知ったところでは、信濃松本平にある赤木山弘長寺にも、時頼廻国伝説の一種とみられる話が残る。弘長三年（1263）、時頼が早世の子六郎政頼（幼名赤木丸）の菩提を弔うために、高野山報恩院阿闍梨憲正を遣して建てた、という。松本平一帯は鎌倉時代「有明の里」と呼ばれた北条氏の所領であり、幼少の政頼がこの地に派遣されていたと寺伝はいう[59]。この伝承は直接に廻国をつたえるものではないが、その変種であるのは明らかだろう。弘長二年ではないにせよ、直後に北条領化したとされていることに注意したい。さらに注目すべきは、この寺の紋が、建長寺や極楽寺などのそれと同じく、三ツ鱗紋であることだ。いうまでもなくそれは北条家家紋である。このことは、この寺が関東祈禱寺であったことを示すものではないだろうか。

また、時頼廻国伝説ではないが、弘安六年（1283）の大型五輪塔で知られる信濃飯田文永寺には、次のような寺伝がある。弘長二年に諸国に疫病が大流行したため農業するもの

が減り、貢米を納めることができなくなった。その旨を時の執権北条時宗（実際には長時がこのときの執権）に申し出たところ、時宗が上皇亀山に口添えした。そして亀山が発願し、悪疫退散の願いをこめて、同年八月から文永元年（1264）にかけ堂宇を建立した。[60] 文意にやや不明瞭さを残すが、ともかくこの勅願寺建立のきっかけが弘長二年に流行ったという悪疫で、北条執権の口添えによるとされることに注意したい。なお、開基知久信貞は、正嘉二年（1258）正月の御的始に射手をつとめた御家人である。

もとよりこれらの伝承の真偽を問うても詮ないことだろう。問題はそれが何を示しているか、である。豊田がいうように、それが得宗領と深く関係しているのはもちろんだが、おそらくそれだけではない。私は具体的に次のように考える。すなわち、伝承のある寺についていえば、それはその寺の関東祈禱寺化を示している、と。そしてそれは、幕府直轄機関として得宗領を管理するためにそこに置かれた、と。信濃弘長寺の三ツ鱗紋などは、そのことを如実に物語るものではないだろうか。

再び板碑の例を挙げよう。常陸国における武蔵型板碑最古の紀年銘資料は、現在結城市立公民館所蔵の「弘長二年十一月廿三日」である。[61] 続いてこの一帯に武蔵型板碑の大量造立が起こる。人々の帰依を誘う何らかの契機が、このときあったと考えたい。常陸は、建長四年以来忍性の拠る、関東における西大寺流律宗最大の拠点であった。その地方に叡尊東下の弘長二年を嚆矢として、武蔵型板碑が造立された。ここには武蔵型板碑造立主体と同流とのつながりを示唆するものがある。

弘長二年に各地で起きた（と伝わる）事件・事象をいくつかみてきた。ここに挙げた例は、多いとはいえないかも知れない。しかしそれでも、これらすべてが鎌倉あるいは幕府と深く関連しているという事実は、認めなければなるまい。網野善彦が「恐怖政治」「専制的」と評した苛烈な幕府追加法の制定も、弘長二年5月23日のことであった。[62][63]

確かにこの年、何かがいっせいに変化した。弘長二年は得宗政権にとってただならぬ年であった。得宗支配の画期的な強化・拡大があった。入間田宣夫は、松島寺や藤崎護国寺など有力寺院の関東祈禱寺化を根拠に、この年が「奥州における一大宗教改革、最明寺殿すなわち北条時頼のリーダーシップによる宗教文化の一大刷新があった、まさに記念すべき年」であったといっている。[64] その評価は正しいのだが、しかしなお言い足りないと言わねばならない。それはおそらく東国全体で起きた、と私は考えるからである。

しかもそれは、相当な軋轢をともなった事件だった。というのも、ここにいたって、かつて石井進が先駆的に指摘した、弘長二年の鎌倉における「政治的陰謀」の存在[65]を思い起こすからだ。石井紹介の史料とはおよそ次のようなものである。同年肥前国分寺地頭藤原忠俊は鎌倉に招集される。彼はその際、嫡子弥二郎季高に朽井村地頭職田畠山野等を譲った。その九月廿九日付譲状には、「かまくらニひそめく事あてめさる候あいた、いのちそ

んめいしかたきによりて」という理由が書かれている[66]。石井はここに、大きな政治的陰謀の存在を嗅ぎとった。そして「肥前国の地頭御家人までが招集令を受けているところからすれば事態は相当深刻であり、陰謀はかなり危険なものであった」という。肥前の武士が死を覚悟するほどの鎌倉での「ひそめく事」――石井のいうとおり、それは相当に大きな政治的事件であったに違いない。そしてそれこそ、弘長二年の一連の事件・事象の背後にあったと推察される軋轢だったのではないだろうか。

この譲状の日付が9月29日であることに注意しなければならない。忠俊はそれから出発するのだから、「かまくらにひそめく事」は10月以降のことになる。すぐ出たとしても、旅程を考慮するとおそらく中旬を過ぎるはずだ。さて、ここで先に挙げた、弘長二年のさまざまな事件・事象の日付をもう一度確認してみよう。日付の多くが11月であることに気づくに違いない。

惣官中原光氏が蔵人所に解を提出したのは11月のこと。鎌倉感応寺板碑の紀年銘が11月20日。津軽名久井法光寺に時頼がやってきたというのも11月。常陸国における武蔵型板碑最古の紀年銘が11月23日。この符合ははたして偶然なのか。そうではあるまい。このようないっせいの変化をもたらすような事件は、弘長二年11月のおそらく直前、もしくは11月前半に起きたのである。するとその時期はまさしく、肥前国地頭藤原忠俊のいう「かまくらニひそめく事」の推定時期に一致することになる。そして、中原光氏の解文は、先にみたとおり、金銅鎌倉大仏完成に関連して出されたと想像できる。とすれば、東国における大事件とは、あるいは「かまくらニひそめく事」とは、大仏完成に深く関係したものと考えざるをえないではないか。

以上を総合して私は、金銅大仏完成時期をいよいよ弘長二年の、それも10月下旬～11月前半と推定するのである。しかし繰返し強調しておかねばならないが、重要な点はそれだけではない。このことの本当の意味は、得宗政権がこのとき宗教勢力と一体化することに成功し、以後両者あい携えて全国のすみずみまで専制支配を及ぼすようになる、その決定的な画期になったことにある。大仏完成は巨大な記念碑であった。そして「かまくらニひそめく事」とは、大仏を前面に押し立てて得宗専制を推進する勢力が反対派を打ち破ろうとした、武力をともなった一連の抗争であった、と私は想像する。東北の諸寺において天台宗勢力が駆逐されるのは、その一環である。

ところで、北条時頼は弘長二年10月16日朝、渡来僧兀庵普寧に導かれ、悟りをひらいたと伝える。時頼の啓問に、兀庵は「天下に二道なく、聖人に二心なし。若し聖人の心を識得せば、即ち是れ自己の本源にして自性なり」と応じ、問答ののち、時頼は「言下に忽然として契悟し、通身汗流」したとある[67]。時頼の禅への帰依を示す逸話である。しかし、日付をみるとき、この話を額面どおりに受け取ることはできなくなる。「かまくらニひそめ

く事」があったと推定される、まさにその直前にあたるからだ。時頼はなぜこの時期に、兀庵に啓問する必要があったのか。ここに、きたるべき抗争に対する決意の確認、または不安の慰藉とでもいうべきものが看取できる、といえば穿ちすぎだろうか。

抗争の詳細について、いま明らかにする手だてはない。弘長二年の関東に関しては、『吾妻鏡』に欠けているだけでなく、いったいに史料に乏しいのである。『鎌倉年代記裏書』『武家年代記裏書』[68]などでも、この年の記事はない。これらの欠を補うかともいわれる『関東往還記』は導入部と８月１日以降を欠き、『関東往還記前記』にしてもどことなく半端な印象を受ける。当該年の史料の欠如はそれ自体興味深いものがあろう。

それにしても不思議なことに、『吾妻鏡』には、ただの一行も叡尊・忍性らについての記述がない[69]。大仏に関しても、建長四年（1252）８月17日の金銅像鋳造開始以後の記事を欠く。ここには何か、叡尊・忍性とその教団についての周到な削除、あるいは徹底した忌避、といったような意図が存在しているとさえ感じる。本章の最後に、この点についてだけ若干言及しておきたい。

『吾妻鏡』の欠巻について石井進は、「ある種の作為の存在をこそ嗅ぎあてるべき」だとし、次のように言っている。「大胆に言い切ってしまうならば、北条氏執権政治護持の立場からする真実の歪曲、美化、あるいは隠蔽という『吾妻鏡』の編者にとっての至上の要請の前に、これら（欠巻の＝引用者注）の年々の叙述は困難をきわめ、遂に未完成のままほうり出され」たのではないか、と[70]。先の、肥前国分寺地頭藤原忠俊譲状から弘長二年における政治的陰謀の存在を推測する文章が、これに続く。得宗にとって大変重大であったはずの弘長二年の欠巻、その前後に書かれるべき叡尊・忍性らの記事の不在、金銅像以後の大仏記事の欠如。これらが示唆しているのは、得宗と西大寺律との関わりを示すものの排除である。

これ以上は憶測になるが、金沢氏一門ともいわれる『吾妻鏡』編者のなかに、両者の関係を忌まわしいと感じる勢力があったのかも知れない。西大寺律と幕府とのかかわりが生じるのはおおむね建長年間以後のことだが、建長元年（1249）・正元元年（1259）・文永元年（1264）などの欠巻年にも同様の事情はあったのか。それに論及する準備はいまの私にはない。ただ、正元元年について、この年が下総型板碑の初発年であり、下総において唐突に発生し、つぎつぎに８基が造立されること[71]、以後爆発的な増加をみせること、そしてその分布が常陸南部と下総という、西大寺律や浄土宗鎮西義などの拠点とかさなることを指摘し、幕府と親しい宗教集団の、何かしら大きな勢力伸張があったらしいことを予測するにとどめる。

Ⅲ．得宗と都市経営

(1)都市と寺社

前章では、金銅鎌倉大仏の完成時期とその意味を論じてきた。そして、それが弘長二年であっただろうこと、このとき、東国において幕府派宗教の飛躍的勢力拡大があっただろうこと、すなわち得宗専制の大きな画期となる事件であっただろうこと、などをみてきた。では、これによって鎌倉時代後期の社会に、何がもたらされたのだろうか。

このとき幕府は、西大寺律をはじめとする宗教勢力と緊密な関係を結び、都市経営の方策を確立する。鎌倉において中核部を幕府が、周辺部を極楽寺が管理するという統治形態がそれである。だが、この方法は鎌倉においてのみ採られたわけではない。これを端緒とし、おそらく原形として、全国の都市、あるいは「都市的な」場において採用されたとみられる。たとえば、有名なところでは、草戸千軒町と常福寺（明王院）・尾道と浄土寺などがその典型である。ここでは前章で述べた点を踏まえ、鎌倉幕府による地域経営のありかたを探ってみたい。

鎌　倉

最初に、鎌倉の方式を簡単に整理しておこう。

まず、市域を基本的にふたつに大別することができる。すなわち、幕府近辺の都市中核部と、前浜（鎌倉前面の砂丘地帯）一帯の周辺部である。前者は丈尺制の敷かれたいわゆる「鎌倉中」であった。後者はそうではない。そこは「浜地」と呼ばれ、大量の人骨や獣骨が集中的に出土する。それは、前浜においては触穢が常態であり、平安京における賀茂川原のようにケガレの忌まれない開放空間であったことを示している。同時に、仁治三年（1242）豊後府中で守護大友頼泰により発せられた「（府中に墓所は）一切不可有」という法令[72]が、鎌倉においても施行されていたことを示唆する。つまり、前浜は死穢の追放先であり、明らかに「鎌倉中」とは区別される存在であった。前浜は鎌倉にとって異界なのである。またここには、貨物倉庫と推測される大型竪穴建物が群集しており、これらが浜地以外にはほとんど発見されないことから、海上輸送の基地であったことが想像できる。そしておそらく、港湾労働者や職能民の集住地でもあっただろう。

前浜を管理したのは、幕府を後ろ楯にした西大寺流極楽寺であった。同寺は忍性以来、和賀江港の維持・管理権を得るとともに、前浜一帯を殺生禁断の地とし、これを厳密に取り締まった[73]。だが、前浜にはおそらく数多くの漁師が住んでおり、殺生禁断が可能なはずはない。一帯の調査では、実際に大量の獣骨なども出土している。とすれば、この「殺生禁断」の実質が、石井進もいうように[74]、海浜の浦人の組織化と統制、いわば入会権の整備

とでもいうべきものであったことは、容易に想像できる。それは前浜の全面的支配にほかならず、その目的がみずからの権益擁護にあったことも間違いない。なお、幕府が前浜での商業権益を極楽寺に委譲したのは文永二年（1265）のことだと考えるが、この点は以前にも書いた[75]ので繰り返さない。問題は殺生禁断の範囲であり、それこそが前浜あるいは浜地の範囲にほかならないが、その点は別稿で論じたい。

先章にみたとおり、以上のような幕府と極楽寺によるいわば二分化とでもいうべき統治構造が成立したのが、西大寺叡尊が鎌倉を来訪した弘長二年である。そして鎌倉にみられるありかたが、各地でおこなわれる方法の原形となる。次に、鎌倉をはさんで列島の西と東の対称位置にあるふたつの大きな都市をみてみたい。

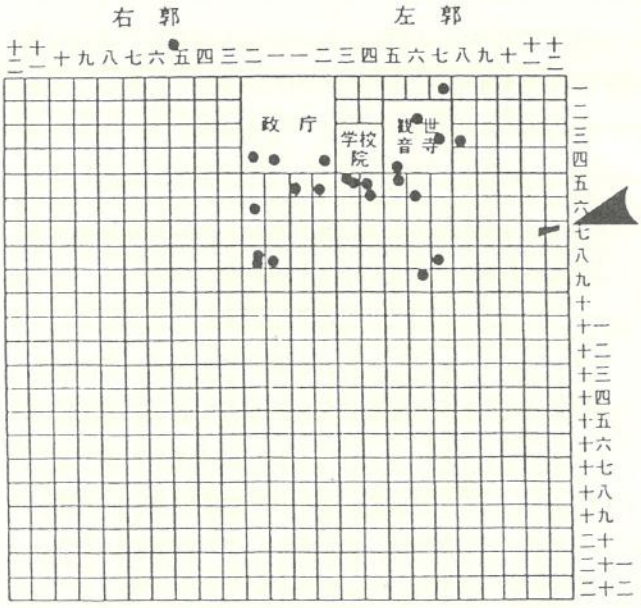
大宰府

鋤柄俊夫は、中世河内丹南の鋳物師集落を論じたなかで、河内日置荘遺跡出土軒丸瓦の瓦当文様に、太宰府鉾ノ浦遺跡出土の梵鐘鋳型の撞座文様と共通したものを見出し、ふたつの拠点鋳造遺跡間の関連を指摘した[76]。坪井良平は、河内鋳物師の作になる梵鐘撞座文様の特徴として、八葉の蓮華文で、「闊弁四葉を二つ重ねて、上の四葉は全形を現わし、下の四葉はその間に覗いてみえる配置になる」ことを挙げているが、鋤柄によれば、日置荘遺跡軒丸瓦瓦当文様にも梵鐘撞座文様と共通の特徴がみられ、それは「中世前期までの段階では特にその類似が明らかである」という[77]。

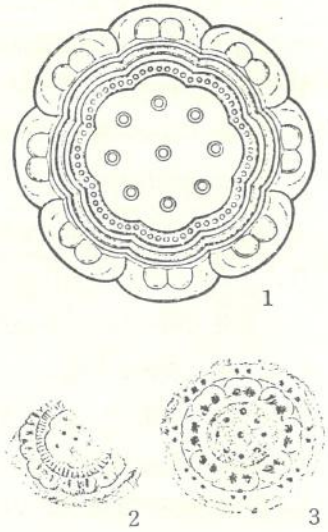
確かに、拓本に見るかぎり、河内鋳物師作の梵鐘撞座文様と、日置荘遺跡の軒丸瓦瓦当文様に共通点は多い。ここには文様を採用する際の基層にある理念に、加飾対象の種類・材料を問わない一元性が認められる。これが石製品などにも見られるかどうか、おおいに興味深いところだが、別の機会に譲る。問題は、それがさらに太宰府鉾ノ浦遺跡出土の梵鐘撞座文様にも共通することである。なるほど、そっくりなものがある。鋳物師の動向を追うとき、この指摘の意義は深い。それは、鋤柄も言及した（第2図）ように、鎮西鋳物師と河内鋳物師の融合の物的証拠にもなりうるからだ。

鉾ノ浦遺跡の概要はつぎのとおり[78]。この遺跡は条坊左郭東辺の六条十一・十二坊辺に位置する。中世の大宰府にはあらたな町割が生じ、政庁南側の条坊地域、観世音寺・安楽寺（現在の天満宮）一帯に町場が展開するが、その東端の一角にあたる。梵鐘・釣灯篭・仏像・鍋などの鋳型が多数出土した。遺跡の年代は13世紀後半から14世紀前半。

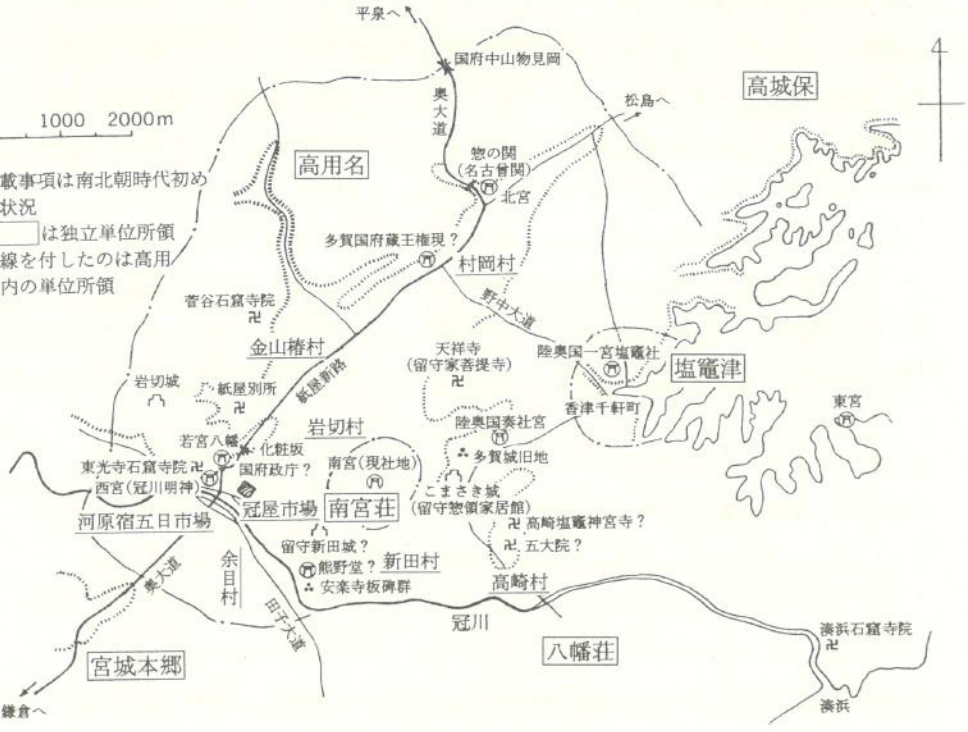
中世の観世音寺には49もの枝院が古代の盛時の四至をこえて存在し、また観音霊場としても知られるなど、鎌倉時代中～後期には再び興隆期を迎えていた。松尾剛次は、著名な観世音寺戒壇が新義律僧教団により、彼らの戒律復興の一環として中興されたことを明らかにしている[79]。また、いまは所在のわからなくなった枝院のひとつ最福寺は、西大寺末寺であった[80]。観世音寺と西大寺律との関係は、否定できないのである。



第1図　鉾ノ浦遺跡（矢印）と周辺の鋳造遺跡
（註78b文献より）



第2図　鉾ノ浦遺跡出土梵鐘撞座鋳型(1)と日置荘遺跡出土の瓦当（2・3）



第3図　陸奥国府概念図（註88a文献より）

ここでまたも惣官中原光氏に登場してもらおう。文永三年（1266）12月13日、左方兼東大寺鋳物師惣官光氏は鎮西鋳物師充てに下文を発し、腹心とみられる平友房を「鎮西往廻惣官代職」に補任した。それは翌年正月、大宰府庁下文により保証される。[81] 網野善彦は「これによって、鎮西鋳物師に対する左方惣官光氏の支配は、一応貫徹した」とみる。[82] そしてその結果かあらぬか、左方作手が鎮西鋳物師を併呑していくのは、網野の論考以来よく知られた事実である。弘安七年（1284）銘薩摩浄光明寺の鐘を鋳た丹治恒頼が「太宰府住人」となっている[83]のは、河内鋳物師の鎮西移住を示すものだろう。

日置荘一帯は右方作手の拠点といわれる。したがって、日置荘遺跡と鉾ノ浦遺跡とのあいだに出土遺物が共通していても、それが必ずしも河内鋳物師と鎮西鋳物師との関係を示すものとはいえないかもしれない。だが、以下のような事実を指摘すれば、この疑問への回答になるだろうか。

河内鋳物師は嘉禎二年（1236）にはすでに、左方と右方、ふたつの供御人集団に分離していることが確実で、のち前者が後者を圧倒するようになる。[84] ところが、文永元年（1264）甲子八月銘のある吉野金峰山蔵王堂の梵鐘は、左方の広階友国と右方の丹治久友とが一緒に鋳たことになっている。両者はいつしか協力関係を結んでいたのである。金峰山蔵王堂の梵鐘は右方が左方に糾合された、おそらく証左だが、注意しなければいけないのは、その寄進先が西大寺流律宗と深いつながりのある点である。ここには、両者を統合したのが同流勢力であること、そして、その契機が鎌倉大仏鋳造だったことを示唆するものがある。そもそもなぜ左方・右方に分かれたのか、そのこと自体大変興味をひかれるところだが、ここでは立ち入らない。鎮西鋳物師との関係を示す遺物の出土が右方作手の遺跡とされる場所からであっても、不都合はないことを確認しておくにとどめる。

ところで、大宰府の外港博多には、鎌倉時代以後西大寺末の大乗寺があった。いまは廃寺だが、櫛田神社の西側、中世では博多浜の海際に位置していた。寺址には地蔵三尊像の彫られた康永四年（1345）銘自然石板碑が残る。[85] 川添昭二はこの寺が肥前東妙寺や豊前大興禅寺と同様、「異国降伏の祈禱をおこなう西大寺末として蒙古襲来を機に建立された」とし、「西大寺流の九州における大陸文物受容の拠点であった」という。さらに、鎌倉極楽寺が和賀江島の管轄権を持っていたことから、「博多・大乗寺と鎌倉・極楽寺は、東西呼応して、瀬戸内海の要衝に存在する西大寺各末寺と連絡をとりながら、大陸文物を受容していた」と推測する。[86] おそらく大乗寺も関東祈禱寺であったのだろう。

なお、博多では中核的寺院である聖福寺の前面でおこなわれた発掘調査で、鎌倉前浜検出のものと似た14世紀代の竪穴建物が検出されており、また太宰府鉾ノ浦遺跡でも、工作用あるいは貯蔵用と目される竪穴建物が見つかっている[87]のは、注意を要する。

さて、以上の諸点をもとに、粗雑なことは承知の上で、中世大宰府の構造を整理してみ

よう。その際、鎌倉における都市経営のありかたを念頭に置けば、理解の助けになるはずである。

まず、政務をおこなう機関として政庁がある。その前面にあらたに町場が展開する。町場には鋳物師などさまざまな職能民も住んでいた。政庁の近くには西大寺と関係の深い寺院があり、霊場として町場住人の尊崇をあつめるとともに、町場の経営そのものに当たっていた。そして宰府の外港博多にも港を管理する西大寺末寺が配されていた。つけ加えれば、その西大寺末寺は鎌倉極楽寺と「東西呼応して」、「大陸文物を受容していた」。

多賀国府

京・鎌倉から奥州にむかう旅人は奥大道をすすむ。名取から北行し、七北田川（冠川）を渡れば、そこは多賀国府である。[88] 渡河点付近の河川敷には市もあった。川の北岸は岩切といい、正面には若宮八幡、左手奥には東光寺がある。川の土手沿いを東に行くと洞ノ口の国府政庁になる。その東は在庁官人の住む新田村で、このあたりから古代多賀城南域にかけて東西大路が通じ、両側に街区がひろがる。そしてこの道は塩竈津に通じていた。奥大道は八幡宮の前を東に折れ、化粧坂から町場の外に出る。斉藤利男によれば、府中は広く、東宮・西宮・南宮・北宮の四社に守られた四至のなかに、寺社・工房・居館などが含まれる。[89] そして鎌倉の「やぐら」のような石窟が、多くの板碑とともに点在する。これが中世陸奥国府の概略である。

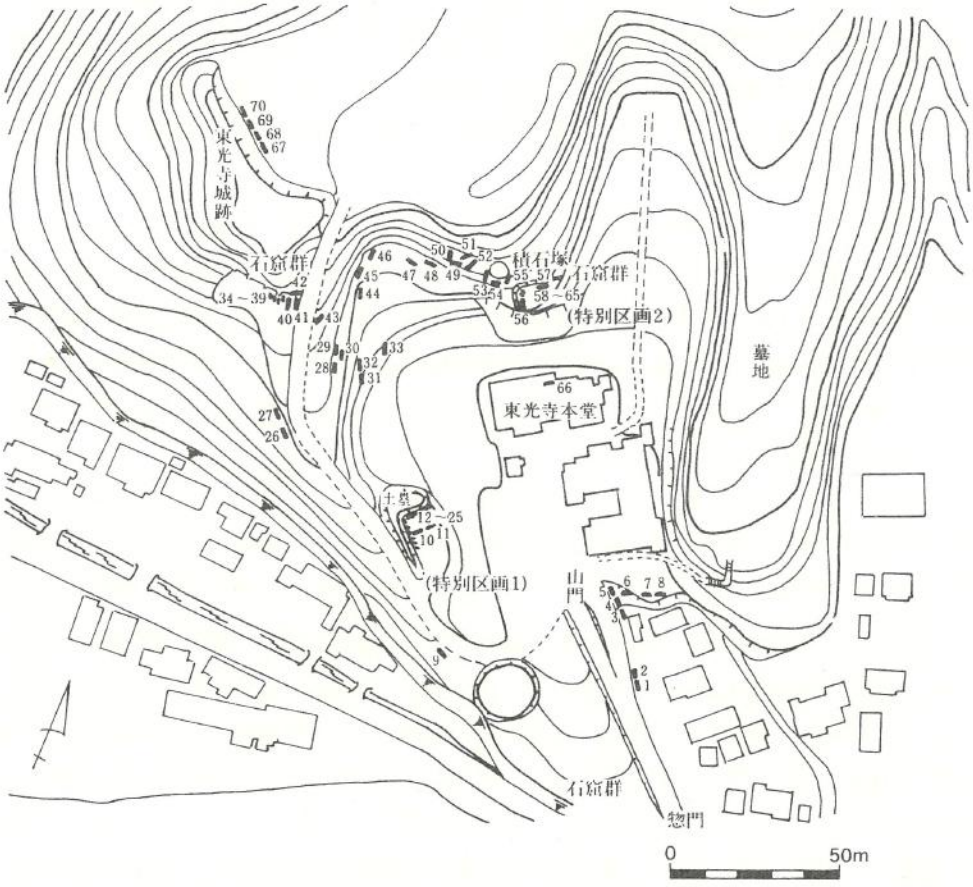
国府外港としては、塩竈津と旧七北田川河口の湊浜とがある。前者には陸奥一宮の塩竈社があり、香津千軒という港湾都市の旧在も伝わる。「香津」すなわち「国府津」であろう。後者は七北田川旧流路により、多賀国府と水路で直結する。府中側の荷揚げ場所が河原宿五日市場と冠屋市場であり、その川港と町場の管理にあたったのが東光寺ではなかったか。東光寺に「やぐら」に似た石窟群があるのは有名だが、湊浜にも「穴薬師」と呼ばれる同様の石窟がある。

忘れてならないのは、松島湾の大刹瑞巌寺である。この寺はもと延福寺という天台寺院だったのが、建長年中（1249～1256）北条時頼の命を受けた三浦勢に滅ぼされ、臨済宗建長寺派円福禅寺とあらためられた。そして、弘長二年に関東祈禱寺となる。時頼と意気投合したと伝える円福寺開山法身（法心）性西は、俗名真壁平四郎、筑波山麓真壁の出身である。建長寺開山蘭渓道隆が二世住持となったのも、入間田宣夫によれば、弘長二年のこと。中世後期には荒廃していたが、近世に伊達政宗によって瑞巌寺として再興される。中世の寺域は広大で、方丈のある今の瑞巌寺中心部は、盛時においては境内地の北西の一隅にすぎない。[90]

弘長二年の関東祈禱寺化は、鎌倉幕府が旧来の宗教勢力を制圧し、この地をみずからの支配下におさめたことを示す。おそらく寺勢からいって、円福寺は幕府奥州経営における

太平洋側最大の拠点だったのではないか。そして、近在の都市・町場や塩竈津・湊浜などの港湾も、寺院を媒体として円福寺の管理下にあった可能性があろう。

多賀国府に戻ると、政庁周辺にひらけた町場を寺院が管理するという構造は、ここでも成立しているとみたい。それがおそらく東光寺であった。この寺は元来は天台宗であったが、七堂伽藍を焼失、鎌倉時代後期に一時国府長官留守氏の菩提寺として興隆する。しかしその後、天文年間（16世紀中葉）に須賀川長禄寺の普岳文統により再興されるまで、荒廃していたという。堂宇の周囲には、建治四年（1278）を初発とする120基の板碑や、やぐらそのものともいえる石窟がある[91]。留守氏の庇護下にあった鎌倉時代後期ごろの宗派はよくわかっていない。しかし、やぐらそっくりの石窟の存在は、鎌倉との結びつきを想像させずにはおかないものがある。そして、鎌倉においてやぐらが、禅律寺院およびその関連地域に集中していることは周知の事実である。両宗派の関与は否定できないのではないか。



第4図　東光寺と板碑配置（註88の文献より）

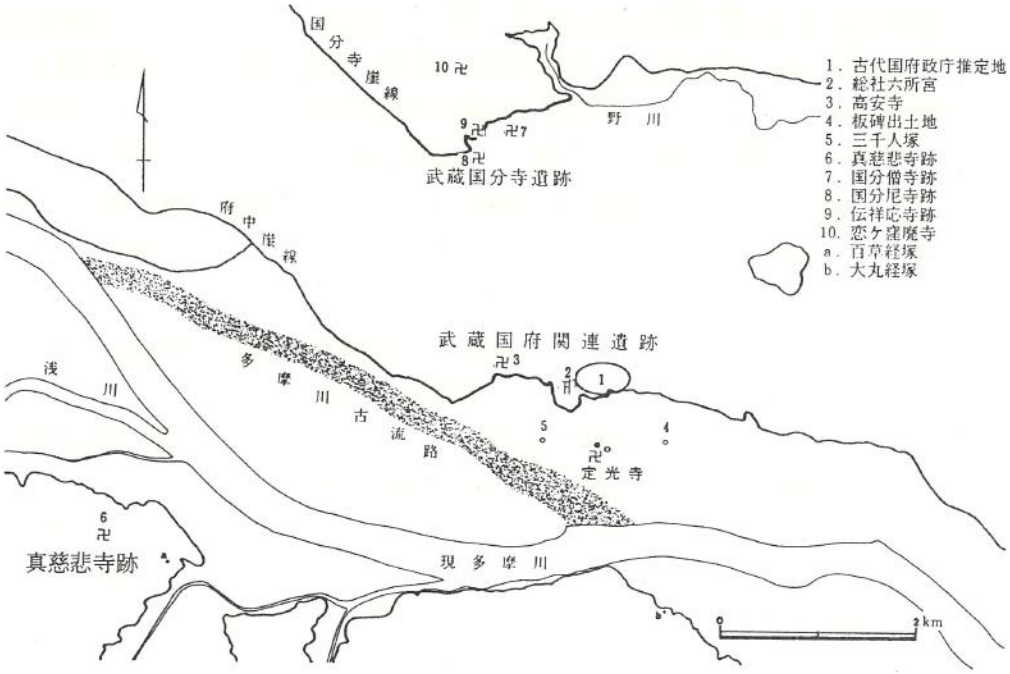
小林康幸は、忍性の関東移住にともない、大和の真言律宗系の寺院から造瓦技術が筑波三村山につたわった可能性が高く、それは鎌倉永福寺出土の13世紀後半～14世紀前半の瓦とも系譜があることを明らかにした[92]。さらに新野一浩によれば、三村山の瓦と円福寺の瓦には共通点が認められ[93]、後者のうちのあるものは製作技法上、東光寺の瓦と類似するという[94]。瓦の系譜については、在地技術と移入技術のかかわりなどに未確定要素も多い。しかし、よく知られている国衙工人と西大寺律との結合の一例を、ここに指摘することはたやすいだろう。

岩切の北にある利府町菅谷道安寺にもやぐらのような石窟があるが、興味深いのはこの寺に、善光寺式阿弥陀三尊の脇侍とみられる金銅観音菩薩立像のあることだ[95]。善光寺式阿弥陀三尊は聖徳太子信仰に関係が深く、著名な鎌倉円覚寺の文永八年（1271）銘三尊像をはじめ、東国に多い。そして、忍性らは太子信仰に大変熱心だった。

限定はもちろんできないものの、これらの事実を考えあわせると、この地方への律あるいは禅といった幕府と近しい勢力の浸透は、やはりあったとみたい。そうだとすれば、その時期は、東光寺境内にある板碑の初発年である建治四年（1278）を、それほどは遡らなかったと考えたい。またこの寺自体、おそらく禅律寺院となり、さらに関東祈禱寺となったと推測する。というのも、管理権の正統性の喧伝には、関東祈禱寺とすることが手っとり早く、かつもっとも有効な方法であっただろうと想像するからだ。入間田宣夫は、「鎌倉後期の在地領主にとって、北条氏得宗あるいはまた将軍家との結びつきを確保することは死活にかかわる重要な課題」であり、「そのさいに、自らの経営する寺院を北条氏御願所あるいは関東御祈禱所とすることはもっとも有効な方法であった」と指摘している[96]。改宗がもしあったとすれば、それが自発的かどうかはともかく、藤崎護国寺や松島寺、立石寺などと同様、ここにも天台宗寺院が鎌倉時代後期に関東祈禱寺となる構図が存在することになる。佐々木馨のいう鎌倉幕府の「禅密主義」への傾斜[97]は、少なくともこの時期の奥州においては確実に認められるのである。

また東光寺に、武蔵慈光寺のように大型の板碑が林立していることは注意を要する。私はこのような大型板碑も、梵鐘などと同様、関東祈禱寺（所）の所在を示している可能性があると考える。

かつて神奈川県二宮町でやぐらが発見されたことがある[98]。やぐらは相模国でも鎌倉以西ではほとんど存在が知られておらず、ここは分布上とびぬけて西に位置する。なぜこのような場所にあるのか。その問いの答えは、東光寺や湊浜におけるやぐらのような石窟の存在を思い出すとき浮き彫りにされよう。そこには共通の構図を見出すことができる。この地は国府津（現小田原市国府津）の隣接地である。すなわち、ここにも国府津一帯を管理する寺院が近隣にあり、このやぐらはそこに関連する可能性があるのではないか。ここに



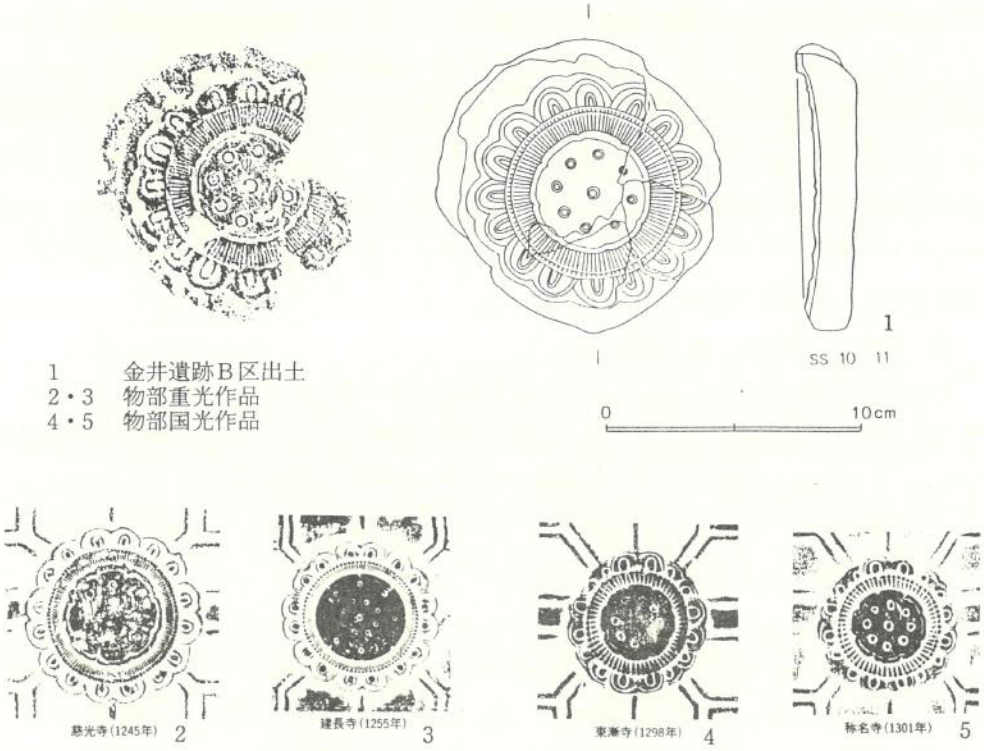
第5図　武蔵国府と真慈悲寺（註105文献より）

第6図　堂山下遺跡と崇徳寺跡（註107b文献より）

はやぐら造営の一側面についての示唆もあろう。

その他

以上、鎌倉幕府による都市経営のありかたを、鎌倉と筑紫・陸奥という、列島中央・西・東（北）における拠点を例にとってみてきた。そしてそこにはいずれも、西大寺律をはじめ、体制派宗教勢力の影が認められることを知った。川添昭二が博多・鎌倉間にみた、海上交通における呼応関係は、房総沖の波頭をこえて、松島と鎌倉とのあいだにも同様に存在していただろう。日本海側の海上交通網の整備と、津軽への建長寺派臨済禅の浸透ぶり[99]からすれば、太平洋側から津軽海峡を経めぐって日本海側にいたる航路も、当然開けていたはずだ。さらに付け加えれば、廻船鋳物師（左方燈炉作手）の鎌倉後期における発展の背景には、彼らを教化した西大寺律の海上交通への勢力浸透があったとみてよい。これ以上は主題から逸脱するので簡単にしておくが、蝦夷管領として得宗被官安藤氏がおかれていたこと[100]からみて、蝦夷ガ島への航路も通じていたことは指摘するまでもない。北海道余市町大川遺跡で出土した13世紀後半の陶磁器類[101]などは、その証左かもしれない。日蓮が「世間の小船等が筑紫より坂東に至り、鎌倉ヨリイノ（夷）島」などまで往来し、といったのは、かならずしも言葉の綾ではなかろう。[102]



1　金井遺跡B区出土
2・3　物部重光作品
4・5　物部国光作品

第7図　梵鐘撞座の比較（註108文献を改編）

さて、関東における都市の事例を二・三挙げ、その経営方式について以上二例のような解釈を敷衍してみよう。これは展望であり、憶測の混じることを許されたい。詳細については稿を改めて検討したい。

まず武蔵府中と真慈悲寺、そして国府の津としての品川湊。

真慈悲寺は多摩川をはさんで府中の対岸、日野百草村にあった[103]。この寺は幕府草創期から関東祈禱寺であった。中世府中は古代政庁推定域西側に広がっており、そこはまた多摩川古流路の左岸でもあった。この付近にはおそらく、品川につながる川湊があり、落川・一の宮遺跡などいくつかの町場も周辺に形成された。真慈悲寺はその管理者としてそこにあった可能性はないだろうか。また、同寺のものと目される金銅阿弥陀如来座像（現日野市百草八幡神社蔵）には、「皇帝」（天皇後深草）・「日本主君」（将軍藤原頼嗣）・「当国府君」（武蔵守北条時頼）らの安穏泰平を祈願する銘文が刻まれている。年紀の建長二年（1250）ごろこの寺に何らかの変化、または刷新のあったことが想像される。金本展尚によると、近在の高幡山金剛寺（高幡不動）にある文永十年（1273）銘鰐口も、もとは真慈悲寺のものであった[104]。これらの鋳造物は、年代と、それが関東祈禱寺に納められていることからみて、鎌倉大仏鋳物師の制作にかかると想像しても、それほど的外れではあるまい。

現在府中市内にある臨済宗大徳寺派の定光寺は、中世には古多摩川左岸の流路そばにあったとされる天台寺院だった[105]。この寺が、あるいは一時鎌倉幕府の地域経営拠点となって、陸奥府中の東光寺のような役割を果たしていた可能性はないか。そして国府は、太平洋への出口である品川湊につながる。品川の寺々の来歴はもうすこし精査される必要があるが、開基北条時頼、開山蘭渓道隆、建長三年（1251）建立と伝える海晏寺[106]に注目したい。蘭渓の止住した東北の寺の例からみて、あるいは海晏寺もまた関東祈禱寺として、湊や町場の管理に当たっていたのではないだろうか。

次に苦林宿と崇徳寺、金井遺跡B区。

苦林宿は武蔵国毛呂山にあったといわれる鎌倉街道の宿である。近年その比定地内にある堂山下遺跡が発掘調査された[107]。この遺跡は13世紀後半にはじまり、14世紀前半に盛行期をむかえ、16世紀初頭までつづく。遺跡の南西には隣接して崇徳寺跡とつたわる寺址があり、「延慶第三暦」（1310）の年紀のある、高さ約2mの板碑が残る。東隣には鎌倉街道上道が通り、北隣には入間川支流の越辺川が流れる交通の要所である。

注目すべきは、堂山下遺跡東約3kmにある金井遺跡B区である（以下「金井B区」）。これは大規模な鋳造集落遺跡で、年代は鎌倉時代後半。梵鐘・仏像・磬・仏具・鍋・釜など多くの種類の鋳型が出土した[108]。赤熊浩一は、梵鐘の形態と撞座文様、仏具獣脚の花菱文などから、物部系の鋳物師と推定し、その武蔵における出職の鋳造所の可能性を指摘している[109]。

この遺跡群について、私はつぎのように理解する。鎌倉時代後半、鎌倉街道に宿が形成されつつあった。近くに川湊もあり、おそらく市も立った。崇徳寺は宿・市を管理していた寺のひとつであり、その創建または再興は、板碑年紀の1310年の直前であった。金井B区の鋳物師集落は物部氏の強い影響下で成立した。物部一族と禅・律、北条得宗家との結びつきが強いのは、前章でみたとおりである。宿や市、鋳造集落は地域を構成するそれぞれの要素であり、あるいは、この地方に君臨する大寺が近くに存在し、一帯をまとめて経営していたのかも知れない。崇徳寺はいわば、宿におけるその出先機関ではないか。そしてもちろんそれらは、この地に覇権を確立しようとした、幕府の意を体したものであっただろう。

くどいようだが、関東のこのふたつの例においても、得宗による地域管理は否定しきれないのである。ほかにも例えば瀬戸内海の津泊・府中、東海の国府と津、得宗御内人安藤蓮聖の往来した日本海側の津泊等、同様の構図を持つ場所はいくらでもある。しかし、これらについては文献史学などに多大の蓄積があり、私の贅言を要しない。

(2)竪穴建物の意味

飯村均は陸奥南部に検出される「方形竪穴建物」（以下「竪穴建物」[110]）を検討し、それが鎌倉におけると同様13世紀なかごろに成立すること、河川や街道などの津・宿・市のような場所に所在すること、一時的な居住や貯蔵をになうものである可能性があること、などを指摘した。そしてその所在地域と成立時期が、北条氏を中心とした伊豆・相模の御家人の地頭職補任に一致するところから両者の関連を指摘し、「得宗家による流通機構の掌握・再編」と「評価することも可能」だという[111]。

飯村の指摘はおそらく正しい。詳論しないが、鎌倉時代後期の東国における津・宿・市と、得宗領および北条氏所領の分布を精査すれば、関係は一層鮮明になるだろう。問題はどういう方法で得宗は流通機構を掌握したのか、直接の管理・支配にあたったのはなにものか、という点にある。本論の最後に、この遺構についての私の考えを簡単に提示し、今後の展望を示しておきたい。それに関しては、栃木県国分寺町にある下古館遺跡が、大きな示唆を与えてくれるだろう。

この遺跡は中世下野薬師寺の西南約1㎞、下野国府の東4㎞に位置する[112]。北隣には祇園町の地名がのこり、その北には祇園社、北東に住吉社、東に八坂神社、西南には愛宕社などがある。奥大道も近くにあったという。周辺からは板碑が多数発見されている。遺跡は「うしみち」とよばれる古街道の一部を、大溝で取り込むように存在する。遺構は古街道の両側にある多数の竪穴建物、掘立柱建物、長方形土壙、堂址のような盛土などで構成され、これらを東西約160m×南北約480mの長方形に掘られた薬研堀が囲い込む。年代は13

世紀末から14世紀。近くにはほかにも、この古街道に沿って、下古館遺跡と同様の形態をもつと予想される遺跡がいくつかあるらしい。遺跡内やや南寄りの古街道西側には、これも薬研堀で方形に区画された一辺22mの土壇状遺構があり、その北側の塚状遺構とともに、宗教的施設と推定されている。

この遺跡を語るのに、下野薬師寺を欠くことはできない。薬師寺はその有名な戒壇とともに13世紀中葉、竹林寺良遍一門の慈猛により律院として再興された。[113] 文永四年（1267）９月、当寺の律僧で叡尊の高弟であった審海が、忍性の極楽寺入寺（同年８月）と時期を同じくして武蔵金沢称名寺にはいり、律院化したのはよく知られている。門前には「貴賤輜素」が市をなしたといい、田代隆は「薬師寺に付随した地方都市ないし定期市の存在」を予測している。[114] 下古館遺跡は、薬師寺との位置関係からみて、その市あるいは宿のひとつであった可能性が高い。

さて、同遺跡からは多数の竪穴建物が検出された。大きさはさまざまだが、大体3.5×2.5m程度のものが多い。深さはたいてい１m以下であるが、一様でなく、まれに1.5mにおよぶものもある。遺構中の土にはいっきに埋め戻されたような状況が看取され、短期間の使用と人為的な廃絶がうかがわれる。この点は鎌倉前浜一帯で検出されるものと同様である。ただ前浜のそれとは、張出しの付くものが多い点、炉のような痕跡をもつものもいくつかある点、など異なる特徴もあり、ただちに技術上の系譜を結ぶことには慎重でありたい。しかし、その状況において通じる点があることも確かである。例えば、鎌倉前浜は西大寺流極楽寺により管理されていた。下古館遺跡を管理していたと推測される下野薬師寺も同流と関係が深い。前浜は港津、下古館遺跡は街道筋という違いこそあれ、ともに流通の要衝である。また、先にすこし触れた、14世紀の博多浜での竪穴建物検出も、その例に加えることができよう。

飯村の指摘したように、13世紀なかごろ以後、竪穴建物は津泊・宿・市などと評価できる遺跡に特徴的に出現する。それは鎌倉をはじめ、東国では頻繁に認められる現象だといってよい。そしてそのころ、一帯に北条氏が進出しているのだとすれば、そこに「得宗家による流通機構の掌握・再編」をみるのは当然であろう。もしかすると、それを流通機構における得宗専制のあらわれと評価しても、さほど的外れではないかもしれない。

憶測を許されたい。鎌倉時代後期以後、おそらくほとんどの津泊・宿・市などといった「都市的な」場に、関東祈禱寺が置かれる。そして得宗政権の出先機関として、一帯を管理していくようになる。前項に挙げたいくつかの町場をはじめ、瀬戸内海の港津や東海道の宿はその例である。竪穴建物の実際の運用も、鎌倉のありかたにみるように、それらの寺院に任されていたのではないか。

Ⅳ．むすび

本稿は二部構成をとって、鎌倉幕府の都市経営を論じてきた。鎌倉時代後期の「得宗専制」と呼ばれる体制は、何を契機に達成されたのか、都市においてどのように現れているのか、どのように行われてきたのか、考古資料でそのことを認識して論じられたものは、過去にほとんどない。私がここで試みようとしたのはそれである。

その際、何よりその前提となる体制の成立契機が明らかにされねばならないと考え、それを鎌倉大仏の完成に求めた。なぜ木像から金銅製にかわったのか。それはいつできたのか。なぜその年でなければならないか。その考察をおこなったのが第一部（Ⅱ．鎌倉大仏と得宗）である。そして、その結果もたらされた都市鎌倉の統治構造を、ほかの地域――とりわけ都市の――経営のひな型として把握しうるとして、第二部でいくつかの中世都市遺跡に事例を探した（Ⅲ．得宗と都市経営）。

本稿を結ぶに際して、若干の展望を示しておきたい。

第一に、得宗政権の覇権強化にあたっては、宗教勢力が決定的な役割を果たしたが、禅・律といった幕府と深くつながった宗派の僧侶個別の動きに注目する必要があること。律僧叡尊・忍性の活動については本稿でもかいま見たが、一方の禅僧では建長寺開山蘭渓道隆の動きに注目してみたい。詳細は不明だが、彼は弘長年間前後（といわれる）に一時鎌倉を離れ、中部地方や東北を歴訪し、いくつも寺を開創している。彼の足跡が、陸奥松島寺や津軽藤崎護国寺にみられるごとく、既存の旧仏教系寺院の関東祈禱寺化とよく重なることに注意しなければならない。もちろん、それはただの教化活動ではなかったはずだ。得宗の意を受け、その支配強化を目指した、きわめて政治性の強いものであったに違いない。蘭渓道隆は鍵となる人物である。

第二に、幕府行政の出先機関としての関東祈禱寺・祈禱所の実相を明らかにすること。本稿では憶測を述べたにすぎないが、おそらくたいていの都市的な場に幕府直轄機関としての関東祈禱寺・祈禱所が置かれ、現業部分を負担する律僧の活動と支えあいながら地域管理にあたったのではないか。今後は、どの宗教施設が祈禱寺（所）であったのか、その目安を見出すことが必要になろう。

第三に、第二の点に関しては、冒頭で述べたように、金石文の精査がおそらく大変有効な方法であろうということ。鋳造遺物や石塔類についてはすでに多くの蓄積があり、鎌倉大仏完成についての示唆も前者から得ることができた。先に何度か述べたとおり、大型板碑の群集する寺に関東祈禱寺の可能性をみることも、おそらくできるだろう。ここには板碑自体の意味を窺わせるものがある。

第四に、出土考古資料の系譜研究にも、宗教性・政治性の視点を導入すること。宗教者と職能民の関わりについては、今のところ瓦の系譜に律宗系工人の関与を見る研究が唯一だといってよい。瓦は技術や文様の系譜を比較的追跡しやすいので、近年鎌倉や筑波を中心に急激に研究が深化し、畿内や東北、さらには九州を含む広範な地域的連関が確認されつつある。おそらく律宗系造瓦技術の結実地域に、幕府の地域管理機関の存在を予想できる。この分野には大きな展望が開けており、今後考古学からの接近を主導する可能性があろう。なお、私は漆器についても瓦と同様の性格を指摘できると考えるが、その点は別稿で詳論したい。また、この視点からほとんど手が付けられていない遺構論においても、本稿で触れた竪穴建物をはじめ、西大寺律の勧進活動として著名な井戸や道路の研究から、活路が開けると考える。

本稿の課題が考古都市論にあったとすれば、そこにいたる道程は長く、本稿の構成も顧みて自ら「木に竹を継ぐ」の観を禁じえない。しかし、中世前期の都市を研究する際に宗教勢力の事蹟を措いては不可能であると考え、まずその前提から明らかにしようとした。膨大な数にのぼる当該期の遺跡理解にあたり、ひとつの出発点として認識されればさいわいである。

つぎの方々・機関に感謝の意を表する。

秋山哲雄・浅野晴樹・網野善彦・荒川正夫・飯村均・石井進・入間田宣夫・内田浩史・大河内勉・大庭康時・大三輪龍彦・岡陽一郎・折茂由利・菅野成寛・菊川英政・五味文彦・小松茂憲・佐久間貴士・笹生衛・佐藤昭嗣・佐藤正之・汐見一夫・宗臺秀明・鋤柄俊夫・田代郁夫・田中則和・手塚直樹・貫達人・野本賢二・橋場君男・秦哲子・服部敬史・原廣志・福島金治・福島政人・藤沢典彦・藤沢良祐・藤原良章・松尾剛次・松尾宣方・村井章介・桃崎祐輔・山田真弘・山本信夫・吉岡康暢

鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会・東国歴史考古学研究所

（鎌倉考古学研究所）

註

1）主として吉岡康暢「中世須恵器研究序説」（『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994　第一部）の整理による。

2）たとえば網野善彦「鋳物師－非農業民の存在形態（下）」（『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店　1984　第三部）参照。

3）四柳嘉章によれば、13世紀後半から渋下地の安価な製品の大量普及があったという（「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第34号　1991　73頁）。

4）この点に関しては次の論考を参照。

a．佐々木馨「一中世北辺の仏教」『北日本中世史の研究』吉川弘文館　1990

b．入間田宣夫「鎌倉建長寺と藤崎護国寺と安藤氏」『津軽安藤氏と北方世界』河出書房新社　1995

5）以下『吾妻鏡』の引用は『新訂増補　国史大系』本（吉川弘文館）による。

6）『東関紀行』鎌倉遊覧の項（朝日新聞社『日本古典全書』本　198頁）

7）平子鐸嶺「鎌倉大仏攷」『国華』第十九編第二百二十四号国華社　1909　179・180頁

8）中川忠順「鎌倉大仏沿革畧」『思想』第八十四号　1925　ほか

9）高橋秀栄「金沢文庫保管『大仏旨趣』について」『金沢文庫研究』第271号　神奈川県立金沢文庫　1983　42頁

10）上横手雅敬「鎌倉大仏の造立」『龍谷史壇』99・100号　1992　314頁

11）清水真澄『鎌倉大仏』有隣堂　1979　50頁

12）平岡定海『東大寺』教育社　1977　39～41頁など

13）『日本霊異記』巻下序文に「一正法五百年　二像法千年　三末法萬年」とある（岩波書店『日本古典文学大系』本　302頁）

14）註10）上横手前掲論文　308～315頁

15）註11）清水前掲書　111～113頁

16）註10）上横手前掲論文　306頁

17）鋳物師とその作品については次の書によった。

a．坪井良平『日本の梵鐘』角川書店　1970

b．同『日本古鐘銘集成』角川書店　1972

c．同「鎌倉時代の梵鐘鋳物師」『歴史考古学の研究』ビジネス教育出版社　1984　310～327頁

d．同「中世相模梵鐘鋳物師考」『歴史考古学の研究』　328～353頁

e．赤星直忠「六　鎌倉の古鐘」『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館　1959

f．『鎌倉の古鐘』（『鎌倉国宝館図録』第十一集）鎌倉国宝館　1964

g．市村高男「中世房総における鋳物師の存在形態」『中世房総の権力と社会』高科書店　1991

h．立田三朗『鋳物師銘譜』村田書店　1992

18）永村真『中世東大寺の組織と経営』塙書房　1989　457頁

19）『律苑僧宝伝』巻第11・12　131～135頁（仏書刊行会『大日本仏教全書』本　255～262頁）

20）註18）永村前掲書　346頁

21）註17 f ）赤星前掲書10頁

22）井上哲朗「房総半島における『やぐら』の存在形態」『中世房総の権力と社会』高科書店 1991　298頁

23）湯之上隆「関東祈禱寺の展開と歴史的背景」『静岡大学人文論集』第28号の2　1977　35～38頁

24）『新編相模国風土記稿』第六巻（『大日本地誌大系』二十四）103・104頁

25）以下、『性公大徳譜』など忍性関係の史料については田中敏子『忍性菩薩行実編年史料』（『鎌倉』鎌倉文化研究会　第44～52号）による。

26）このほか西大寺蔵『相州鎌倉府極楽寺忍性菩薩遊行略記』には、仁治三年（1242）に関東に下向し7月に帰ったとある。この書は諸本を参考に明治時代に書かれたものといわれているが、この記事自体は他書に見当たらないので、誤記の可能性がある。だがもし本当ならば、その直後の記録である『東関紀行』の「鎌倉遊覧」の記事に、そのとき大仏は三分の二ほどの完成度であったとあり、忍性もほぼ同じものを見ていたことになる。

27）以下、『金剛仏子叡尊感身学正記』『関東往還記』『関東往還記前記』など叡尊関係の史料については『西大寺叡尊伝記集成』（『奈良国立文化財研究所史料』第二冊　1956）による。

28）松尾剛次による最新の翻刻の「西大寺諸国末寺帳」による（「西大寺末寺帳考」『勧進と破戒の中世史―中世仏教の実相―』吉川弘文館　1995）。

29）湯之上隆「関東祈禱寺の成立と分布」『九州史学』第64号　九州史学研究会　1978　10頁

30）真福寺遺跡の概要と同遺跡出土の鍋鋳型については次の書・論考によった。

a．山本彰ほか『真福寺遺跡―調査の概要―』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター 1986

b．中村淳磯「河内鋳物師関連の鋳造遺構」『青山考古』第10号　青山考古学会　1992

31）鋤柄俊夫「中世丹南における職能民の集落遺跡―鋳造工人を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集　1993

32）名古屋大学文学部編『中世鋳物師史料』法政大学出版局　1982　12号文書

33）網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店　1984　467～473頁

34）註32）前掲書　11号文書

35）註33）網野前掲書　472頁

36）註27）に同じ

37）馬淵和雄「浜と板碑―五所神社蔵弘長二年銘板碑の意味―」『能蔵寺跡―材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査―』鎌倉市教育委員会　1995

38）平雅行「鎌倉仏教論」（『岩波講座　日本通史』第8巻）における評言（280頁）。

39）『西大寺叡尊像納入文書』中の「授菩薩戒弟子交名　その一」による（『西大寺叡尊伝記集成』所収）。

40）行基の事蹟についてはおもに次の書による。

a．井上薫『行基』吉川弘文館　1959

b．千田稔『天平の僧行基』中央公論社　1994

41）『大和国生駒山有里村行基菩薩御遺骨出現事』（『続群書類従』第八輯下）

42）前園実知雄「生馬山竹林寺と行基の墓」『考古学と生活文化』（『同志社大学考古学シリーズ』Ⅴ）同志社大学考古学シリーズ刊行会　1992

43）註40ｂ）千田前掲書10頁

44）長谷川嘉和「生馬山竹林寺の開創伝承考証」『日本宗教の歴史と民俗』隆文館　1976

45）細川涼一「大和竹林寺・般若寺・喜光寺の復興」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館　1987　43～47頁

46）追塩千尋「忍性の宗教活動について」『仏教史学研究』22－２　1980（のち『中世の南都仏教』吉川弘文館　1995　所収　294～296頁）

47）「新義律僧」については松尾剛次『鎌倉新仏教の成立』（吉川弘文館　1988）・同註28前掲書等参照。

48）鎌倉幕府の専修念仏弾圧については次の書・論考などによった。

a．辻善之助『日本仏教史第二巻　中世篇之一』岩波書店　1947　第七章第六節

b．平雅行「建永の法難について」『日本中世の社会と仏教』塙書房　1992

49）註10）上横手前掲論文　317～323頁

50）佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第一巻　鎌倉幕府法』岩波書店　96・212頁

51）「有無ノ二見ノ事」『雑談集』巻第八（三弥井書店『中世の文学』本　248頁）

52）註37）馬淵前掲論文

53）服部清道『鎌倉の板碑』（『鎌倉国宝館論集』九）

なお、註37）馬淵前掲論文注10もこのように訂正する。

54）豊田武「七　北条時頼と廻国伝説」『英雄と伝説』塙書房　1976（のち『豊田武著作集』第七巻　吉川弘文館　1983所収）

55）『天台記』（『松島町史　資料編』Ⅱ　松島町　19～22頁所収）による。

56）次の史料・論考によった。

a．註55）前掲『松島町史　資料編』Ⅱ　９頁

b．入間田宣夫「古代・中世の松島寺」『松島町史　通史編』Ⅱ　松島町　1991

57）註４ｂ）入間田前掲論文　120頁

58）高木宗監『建長寺史　開山大覚禅師伝』大本山建長寺　1989　第六章

59）山田真弘・宮下済雄『弘長寺』赤木山弘長寺　1990

60）『文永寺由来誌』（『重要文化財文永寺石室・五輪塔修理工事報告書』重要文化財文永寺石

室・五輪塔保存修理委員会　1987　写真図版71）による。

61）斎木勝「1茨城県」『板碑の総合研究2　地域編』柏書房　1983

62）網野善彦『蒙古襲来』小学館　1974　72頁

63）註50）前掲史料集　217～219頁

64）註57）に同じ。

65）石井進「『吾妻鏡』の欠巻と弘長二年の政治的陰謀（？）」『鎌倉武士の実像』平凡社　1987（初出『中世の窓』8　1961）

66）「藤原忠俊所領譲状案」『肥前国分寺文書』（『鎌倉遺文　古文書編』第12巻8876号）

67）『東巌安禅師行実』（『続群書類従』第九輯上），読下しは村井章介「渡来僧の世紀」（初出『都と鄙の中世史』吉川弘文館1992　192・193頁，のち『東アジア往還』朝日新聞社　1995所収）による。

68）『鎌倉年代記裏書』『武家年代記裏書』ともに『増補続史料大成』第51巻所収。

69）両者の人名検索は『吾妻鏡人名索引』によった（御家人制研究会編　吉川弘文館　1971）。

70）註65）石井前掲論文　316頁

71）石井保満「下総板碑発生の研究」上・中・下『史迹と美術』第602・603・604号　史迹と美術同好会　1990

72）註50）前掲史料集138頁

73）貞和五年二月十一日付「足利尊氏書状」（「極楽律寺要文録」『金沢文庫研究紀要』第一号神奈川県立金沢文庫　1961　ほか所収）

74）石井進「都市鎌倉における『地獄』の風景」『御家人制の研究』吉川弘文館　1981　92頁

75）馬淵和雄「武士の都　鎌倉―その成立と構想をめぐって―」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社　1994　60～62頁

註37）馬淵前掲論文34・35頁　ほか

76）註31）鋤柄前掲論文211～213頁

77）註17）a坪井前掲書93・96頁

78）鉾ノ浦遺跡の概要については次の論考によった。

a．山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡（福岡県）」『仏教芸術』174号　毎日新聞社　1987

b．山本信夫「大宰府における鋳物生産遺跡―鉾ノ浦遺跡を中心に―」『梵鐘の音は時を越えて』美原町教育委員会　1990

79）松尾剛次「筑前観世音寺・下野薬師寺両戒壇の授戒制」註28　松尾前掲書330頁

80）註28）に同じ。

81）註32）前掲書　参考史料6号文書

82）註33）網野前掲書471頁

83）註17ａ）・同ｂ）坪井前掲書梵鐘番号1089の銘

84）註33）網野前掲書446頁

85）多田隈豊秋『九州の石塔』上巻　㈶西日本文化協会　1975　108頁

86）川添昭二「鎌倉時代の対外関係と文物の移入」『岩波講座　日本歴史』6　岩波書店　1975　69頁

87）大庭康時「聖福寺前一丁目２番地―中世後期博多における街区の研究(1)―」『法哈嗟』第２号　博多研究会　1993

88）多賀国府の概要については次の論考によった。

ａ．斉藤利夫「多賀国府の都市プラン」『みちのくの都　多賀城・松島』（『よみがえる中世』７）平凡社　1992

ｂ．入間田宣夫「陸奥府中ノート」『中世陸奥国府の研究』ヨークベニマル　1994

ｃ．千葉孝弥「多賀城から府中へ」『中世都市研究』２　新人物往来社　1995

89）註88ａ）斉藤前掲論文60・61頁

90）註55）・註56ｂ）前掲史料・論文など

91）佐藤正人『仙台市東光寺板碑群』仙台市教育委員会　1986

92）小林康幸「関東地方における中世瓦の一様相―中世都市鎌倉と周辺地域にみる系譜性を中心として―」『神奈川考古』第25号　神奈川考古同人会　1989

93）新野一浩『瑞巌寺境内試掘調査概報』瑞巌寺博物館　1993　36・37頁

94）新野一浩「中世円福寺の瓦」『瑞巌寺博物館年報』第15号　1990　54・55頁

95）野崎準「中世宮城郡内の若干の考古資料―留守氏関係の遺跡・遺物―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』　1979（のち註88ｂ前掲『中世陸奥国府の研究』所収）

96）入間田宣夫「中世の松島寺」渡辺信夫編『宮城の研究』第三巻　清文堂　1983　80頁

97）註４ａ）佐々木前掲論文　442～440頁

98）大三輪龍彦ほか「中郡二ノ宮町長峯所在『やぐら』調査概報」『鎌倉考古』No. 7　鎌倉考古学研究所　1981

99）註４ａ）佐々木前掲論文435～442頁など

100）大石直正「外が浜・夷島考」『関晃先生還暦記念　日本古代史研究』吉川弘文館　1980　583～588頁

101）吉岡康暢「ｆ　北方流通史と大川遺跡」『1994年度大川遺跡発掘調査概報』北海道余市町教育委員会1995

102）「薬王品得意鈔」『昭和定本　日蓮聖人遺文』第一巻　身延山久遠寺　1953　340頁

103）真慈悲寺の概要については次の書によった。

ａ．清野利明ほか『京王百草園の発掘調査―幻の真慈悲寺を掘る―』日野市遺跡調査会ほか

1993

b．『中世の日野～幻の真慈悲寺と高幡不動～』日野市ふるさと博物館　1993

c．峰岸純夫ほか『真慈悲寺の研究』多摩の古代・中世を考える会　1993

104)金本展尚「中世前期における多摩川中流域―高幡金剛寺の周辺―」『都と鄙の中世史』吉川弘文館　1992　160～164頁

105)深澤靖幸「武蔵府中定光寺とその周辺」『府中市郷土の森紀要』第5号　1992

106)柘植信行「都市形成と儀礼域の変容―品川の民俗空間試論―」『都市周辺の地方史』雄山閣　1990　239頁

107)堂山下遺跡の概要については次の書・論考によった。

a．宮瀧交二ほか『堂山下遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991

b．同「中世『鎌倉街道』の村と職人」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社　1994

108)赤熊浩一『金井遺跡B区』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994

109)同前書第3分冊　581～595頁

110)さまざまな呼称のあるこの遺構について、私は「竪穴建物」の語を用いる。かつて私も使用し、また鎌倉の一部にいまも残る「方形竪穴建築址」なる呼称は、以下の理由により適当でないと考える。第一、長方形のものも大変多いのに、一律に「方形」の語を冠するのは無理であること。「長方形の方形竪穴」という表現は不可能である。第二、一方に「掘立柱建物」「礎石建物」という語が普通に使われているにもかかわらず、この遺構にのみ「建築址」とつけるのは、空疎なばかりか、比較検討の際の阻害要因になりかねないこと。第三、住居でないものがおそらく大半なので、「住居址」とは呼べないこと。なおこの点は、註75）馬淵前掲論文　63頁参照。

111)飯村均「中世の『宿』・『市』・『津』―陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物―」『中世都市研究』第3号　中世都市研究同人会　1994　38～41頁

112)下古館遺跡の概要については次の書・論考によった。

a．田代隆ほか『自治医科大学周辺地区』年次報告のうち特に昭和61～63年度　㈶栃木県文化振興事業団　1987～1989

b．田代隆「下古館中世遺跡の調査について」『日本歴史』第485号（1988年10月号）　吉川弘文館

113)註28）松尾前掲書　331頁

114)註112a）田代前掲昭和61年度報告9頁

付記　脱稿から校正までのいささか長い時間的経過のなかで、筆者の認識にもいくらかの深化があった。ついては最近の拙稿「鎌倉大仏と何か」『大航路』No.14㈱新書館 1997も併読されたい。